けいおん！モブ王

ソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！モブ王

【Ｎコード】
Ｎ７２７６Ｚ

【作者名】
ソウル

【あらすじ】

謎の死を遂げた主人公は共学設定のけいおんの世界に転生することに。

「やった！　軽音部全員にフラグ立てまくってやるわ！」「いや、お前主人公じゃなくてモブだから」「な、なんだってー！？」

無慈悲な神は少年の夢をあっさり打ち砕く。しかし、モブならばモブらしくモブにフラグを立てるのみ！　モブの中のモブ。モブ王になるため、男は今日も奔走する！

「モブ王に、俺はなる！」更新は遅めです。「……え？」

プロローグ（前書き）

少年は二次元の扉を開く……
モブキャラはまだ出ません。

プロローグ

常闇。
表現するならその言葉が妥当かと思う。
目を閉じたり開けたりしても視界に映る情景は変わらない。ひたすら真っ暗だ。手探りしてもなにかを掴むことはなく、空（くう）が手をすり抜けていく。
なにもないのだろうか？　さっきから足が地に着いている感触さえない。自分はいま、浮遊しているのだろうか？
どんな所で？　どのような状態なんだ？　わからない……。

まるで、水中を漂うクリオネになった気分だ。違うのは、自分で行き先を決められないということだ。ただ流れに身を任せている。そもそも自分の体は移動しているのだろうか？　ただフワフワと浮いているだけなのではないか？
途端、急な寂しさと恐怖を覚える。
いつまでこんな状態が続くんだ？　ここから出たい。ここは暗くて静かすぎる。誰か、俺をここから救い出してくれ！

そう願った刹那、突如目の前に一筋の光が灯る。やがて、その光は大地から泉が溢れるように広がり、この暗黒の海を白光で満たしていく。
突然の発光の眩さで目を閉じる。やがて俺の意識も闇と同じく、光に包まれていった。

「目覚めよ。少年」

重苦しい声が耳に響き、俺の脳を覚醒へといざなう。

「……ん？」

目の前に映るのはさっきの常闇とは真反対の白い世界だった。雪原のように果てしない白。

さきほどの浮遊感もない。体全体が地に身を投じている確かな感触がある。どうやら俺はいま横になっているらしい。上半身だけを起こし、辺りを観察する。

「どこだ？　ここ……」

「少年よ。こっちだ」

「っえ？」

再び重苦しい声が俺に語りかける。体中に振動が伝わるほどの声量なのに、声の持ち主らしき姿は見当たらない。

「誰だ？　どこにいる？」

「こっちだ、こっち」

「こっちって、どっちだよ？」

さっきから首を動かして３６０度を見回すが、ただ真っ白な空間があるだけである。

「だぁーーーっ！　もう！　少しは神っぽく語りかけているのに、

いい加減気付け！！　下だよ！　下！　しーーたっ！」

下？　そういえば俺どこに座っているんだ？　なんだかやけにぷにゅぷにゅしている土だが……。足場の独特な手触りをさわさわと動かし確かめる。

「や、やめろ！　こそばゆいだろろうが！」

そして気付く。ばかでかい声は足場から聞こえているということに。俺は視点を下に移すと……。

「さっさと降りろ！　小童が！」

巨大な人間の顔が、これまた巨大な鼻に腰を据えている俺に非難する目を向けて怒鳴る。

……って、はい？

「きゃあああああああああっ！　化け物――――――っ！！」

「失礼な。私は神だぞ」

ふんっ！　と言って顔を揺らし鼻から俺を離れさせる巨人。俺は面白いようにぴゅーっと飛んでいく。

「ぐわしっ！！」

なにもない空間にも関わらず、壁のようなものに顔面が激突する。

「まったく、人が……じゃなくて神が休憩中に昼寝をしているときに突然鼻に落っこちてきおって。罰当たりにもほどがある」

「あがが、ががががが……」

胡坐をかいて溜息をつく巨人に、痛む鼻を押さえながら震える俺。

「それで、お前何者だ？」

「こっちのセリフだ！」

なに俺の方が異邦人みたいな扱いになってんだよ！　アンタの方が規格外で異常な存在だろ！

「つか、そんな濃い顔で見下ろさないで！　影かかって怖すぎる！！」

「き、気にしていることを……ちっ！　ちょっと待て」

そう言うと巨人の体は空気が抜けていく風船のように縮んでいき、俺と同じくらいの背丈になる。

「これでいいか？」

「あ、ああ……」

しかし縮んでも顔濃ゆいわ……。なんというか、北斗〇拳に出てくるキャラクターのようだ。ちなみに「あたたたたたたたたたっ！」と言う方じゃなくて「ひでぶっ！」とか叫んでやられそうなタイプ。すなわち雑魚キャラ臭がする。

「で、お前なに？」

その雑魚キャラ臭がプンプンする濃い顔で頭を傾けて尋ねる自称神。気色悪いにもほどがある。つーか……

「だからこっちが聞きたいんだよ！　それは！　てか小さくなれるなら最初からその姿で出てこいよ！　心臓止まるかと思ったろ！」

「止まるもなにも……、お前とっくに死んでいるだろ？」

「……はっ？」

なに言ってんだ？　この「ひでぶっ！」野郎は。俺が、死んでる……？

「お前は、もう死んでいる……」

「あべしっ！　……じゃなくて、どういうことだよ！」

「そのままの意味だ。ここは魂だけが辿りつける場所……生と死の狭間の世界だ。いまのここにいるお前は魂だけの存在。つまり、死んでいるってことだ」

「……」

そんな馬鹿なことが、とはっきり否定ができない。足場のない暗い空間。巨大な人型から小さくなることができる自称神が住む白い空間。さっきから非現実な出来事が起きている。とすると、本当にここは死後の世界だって言うのか？

「お前は、もう死ん……」

「二度もやらんでいい！」

人がシリアスになっているところで同じボケをする神に一喝すると、

「私雑魚キャラじゃないん……。そりゃあ神の間じゃ各位は低いけどさぁ、雑魚じゃないもん……」といじけ始める。他の奴らにも小物扱いされてるのか、コイツは。

「……とにかく、仮に俺が死んでいるとして、アンタは俺を天国か地獄に行かせる神、ってところか？」

「なんの話だ？」

「えっ？　だって、アンタが俺をここに連れてきたんだろ？」

「違うぞ。お前が勝手にここに入ってきたんだろうが。第一、人は死んだら魂の状態からやがて完全な無になるのだ。お前たちが言うような天国とか地獄と言った概念は存在しない。……まあ、未練がある魂を救済する、罪のある魂を裁くということはしているがな。そう意味では天国と地獄と言うかもしれん」

どうやら俺がここに来たのは神にとって不本意のことらしい。

「普通なら、魂をこの空間に招くという行為は私の意思で行われる。誰でもが来れるわけではない。私が選別した人間しか来れないはずなのだが、お前は自分自身でここまで辿りついた。……とすると、よほどの未練があってここに来たということになるな」

未練……。死んでも思い残すことがあって、あの世に行くことができない。いまの俺はそういう幽霊のような存在らしい。

けれど、俺が思い残していることってなんだ？　そりゃこんな若さで死んじまったら、いろいろ未練はあると思うけど……。

「どれ。お前の記憶を見て、どんな未練を持っているのか調べてみよう」

神が俺の頭に手を置き、目を閉じて調べる素振りをする。選ばれた人間しか来ることができないこの世界に、自力でやって来るほどの未練とは……。

「ええと、なになに？　死ぬ間際にお前が無意識に強く思ったことは……『〝けいおん！〟のような世界でリア充になりたかった』……だとさ」

「ぶーーーーーーーーーーーーっ！」

盛大に吹いた。そりゃ吹くわ！　なに考えてんの！？　死んだときの俺！　普通、自分の生まれ育った場所とか家族のこととか思いやりません？　もうすぐ命が消えるというシリアスな場面でそんなこと思うとか情けなさすぎだわ！　いや、「けいおん！」大好きだけどさ！　それにしったって最後の最後まで二次元に現実逃避ですか！？　俺！

「いやあ、欲望に忠実だなお前。呆れるけど……。まあ『けいおん！』がらみの未練じゃないとここには来れないだろうと思っていたが、案の定だったな」

「えっ、どういう意味だそれ？」

俺が尋ねると、突然、神は眉間に皺を寄せ、キリッ！　とした真面

目な顔になる。濃い顔がさらに濃さを増して非常に気持ち悪い。

「名乗るのが遅れたな……。我こそは『けいおん！』の世界を司り、『けいおん！』に関わるすべての事象を管理する神！　『けいおん神』になり！　ひれ伏せ人間よ！　お前たちが崇めてやまぬ『けいおん！』の命運は我が手に握られている。崇めるならば我を崇めよ！　さすれば、『けいおん！』の世界は今後も発展を続け、無限の繁栄を約束されるであろう！」

「……」

黒い仮面に黒いマントをした厨二病の反逆者が、「日本人よ。私は帰って来た！」と高らかに手を上げるシーン連想させるその出で立ちに呆然とするわたくし。

「どう？　かっこよかった？」

どや？　と言った感じでいまだに眉間に皺を寄せた状態でこちらに顔を向ける「けいおん神」。

「痛い……」

「ん？　どこか痛むのか？」

「いや、アンタが」

指を差して正直な感想を言うと、ズーン……と体育座りして落ち込む「けいおん神一（笑）」。

あの厨二発言が本気でかっこいいとでも思ったのだろうか？

「つーか、なんだよ『けいおん神』ってのは？」

「言葉通りの意味だ。私は『けいおん！』という創作作品から生まれた世界を管理する役割を持っている」

「いや、全然わかんないし。現実世界を管理しているってことならイメージできるけど、『けいおん！』っていうのは作り話だろ？架空の作品の世界を管理するってどういうことさ？」

フィクションでよく見る因果律を調整する神とかみたいな奴ならまだ理解しやすい。しかし、「けいおん！」から生まれた世界の管理と言われてもいまいちピンと来ない。

「確かに『けいおん！』は人の空想から生まれたものだ。しかし、空想であるものが現実存在であるお前たち人間に認識されているということは、それは『現実の事象』と言えないか？」

「『現実の事象』？」

「そうだ。『けいおん！』はまずマンガから始まったな？　この時点で『けいおん！』は『マンガ』という現実のものとして世界に存在しているんだ。続いてアニメ化。お前も知っている通り、この『アニメ化』という現象によって『けいおん！』は大ブームになり、オタクから、そういうのとはまったく縁のない一般人、分け隔てなく多くの人間に認知されるようになった。それから多様なグッズの発売。バンド結成が多発するという社会現象。声優たちによるライブ……。

ここまで来ると『けいおん！』という空想話は十分すぎるほどに現実に浸透していると言えないか？

現実に生きる人間が空想の世界を現実の一部にする。空想の世界は

現実の人間に認識されることによって『現実の事象』となる。たとえ作り話だとしても現実世界に含まれているのならば、その架空世界は『在る』ということになる。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。話が急に突飛しすぎて訳がわからねえよ」

いや、なんとなくは理解できる。けれど哲学的すぎていて漠然としか理解できない。

『けいおん!』の世界を管理するという具体的なイメージに結びつかない。

「ふむ。そうだな。例えば、お前は『けいおん!』がどういう話かは知っているよな?」

「そりゃ最初から終わりまで見てるからな」

二期の最終回を見たときの感動はいまだに忘れられん。

「そしてお前の他に『けいおん!』を見た人間と『けいおん!』の話題で会話したとき、お前が知っている『けいおん!』と相手の知っている『けいおん!』の話は一致する」

「そりゃ同じ番組見てるんだから、当たり前だろ」

「……じゃあ、もしその中でまったく内容が違う『けいおん!』の話をする人間がいたら?」

「はっ?　どういうこと?」

「『けいおん！』はバトルアニメだ。『けいおん！』はスポ根アニメだ。『けいおん！』は男女とのラブストーリーだ……と『けいおん！』の原型をとどめていない話を語っている人間が現れたとする。どう思う？」

どう思うもなにも……。

「『けいおん！』ってのは軽音部のメンバーで展開されるほのぼのアニメだろ？　バトルとかスポ根とかの要素なんてどこにもない。俺が話しているのはアニメで放送された『けいおん！』の話だ。仮にそんな発言する人間がいたら、にわかか、ただの冗談だろ。つーか、同じ『けいおん！』を見ていたらそもそも、そんな連中現れないだろ？」

「なら、そいつらが『自分が昨日見た“けいおん！”こそが本当の“けいおん！”だ』と主張してきたらどうする？」

「えっ？」

「お前はほのぼのとしたのが本当の『けいおん！』だと言うが、向こうはバトルをしている『けいおん！』が本当だと言うのだ。さてこれはどちらが間違っているのだ？」

「そんなの向こうに決まって……」

「いや、どちらも正しいんだ。お前は前日にほのぼのとした『けいおん！』を見て、一方はバトルものの『けいおん！』を見たんだ」

「はあ？」

ますます訳がわからない。

「認識の相違。話の食い違い。なぜこのような現象が起きるのか？

……それは、『けいおん！』を構成する世界の因果律が崩れているからなのだ。

二次創作、同人誌というものがあるだろう？　すでにある原作を題材にして自分で話を作るという行為だ。出版社に投稿するというようなことをしない限り、趣味の範囲で好きに書くことができる。だからバトルものやスポ根ものや恋愛ものといった、原作の面影もない話だって作れる。だがこれが本当の『けいおん！』とは思わないだろ？」

「当たり前だ。二次創作なんだから。原作との区別くらいできる」

「確かにお前たち人間はそうだ。だがな、『世界』そのものはそう認識しないのだよ」

「世界」そのもの？

「人々の空想から生み出され、現実に存在する『けいおん！』は、やがて一つの小さな世界となる。目には見えないが、確かにあるのだ。『けいおん！』に関わる要因はすべてこの『けいおん世界』に凝縮される。アニメ化。グッズ化。ライブ化。映画化。そういった情報がすべて集まって、そのまま現実に干渉する」

「それ、無意識の集合体って奴か？」

いつの日だったか、心理学の本で読んだことがある。人の心は深いところでみんな繋がっているのだと……そんな内容だった。

「そうだな。この『小さい世界』というのは人々の深層心理によって創られている。人々が無意識化で認知している『けいおん！』の情報をまとめている空間だ。少しでも『けいおん！』に関わる情報はすべてここに集まる」

「……なんか、とんでもなく壮大な内容だけど、まあだいたいイメージはできた。けれど、それがさっきの内容の食い違いとどう関係す……」

「言っただろう？　『“けいおん！”に関わる情報がすべて集まる』と。ならば二次創作、同人誌の内容もこの世界に取り込まれることにならないか？」

「……あ」

つまり、コイツが言いたいのは……。

「人間は、原作者が書いたオリジナルと原作を参考にしたオマージュの区別は付けられる。だが分け隔てなく情報を収集する世界そのものにはそういった『区別』という行為はない。例え原作とまったく違う話でもそれが『けいおん！』であるならば、『けいおん！』の一部となる。つまりオリジナルとオマージュがごっちゃになってしまうのだ。そして、そのごっちゃになった情報はそのまま外部……現実世界に表出してしまう。ここでさっきのような矛盾が発生する。ほのぼのとした『けいおん！』とバトルものの『けいおん！』が同時に存在し始めるのだ。これはどちらが本物だとか偽物だとかの話にはならない。一度『現実』として表出したものは、そのまま『事実』になってしまうのだ。

もし内容が変わった『けいおん！』を見たとする。それを見た人間は、もともと知っていた『けいおん！』の情報を書き換えられ、そ

の『けいおん！』がオリジナルだと認識するようになってしまうのだ。なぜならその者にとって、その『けいおん！』が現実でありオリジナルだからだ。
だがそれでは辻褄が合わなくなる。合致しない内容。統一されない認識。いつしか『けいおん！』は荒唐無稽な話になり、小さい世界だけではなく、現実世界にも支障をきたす」

「……その事態を招かないために、あんたたちがいるのか」

「ようやく理解したか。私の役目は『けいおん世界』の因果律の調整……つまり世界そのものにオリジナルと二次創作を分別させて、現実世界の人間の認識に矛盾を発生させないことだ。これは『けいおん！』だけではない。すべての創作作品に言えることだ。
それに、例え二次創作がない作品でも、人々が無意識でイメージしたオマージュ……『こうなったら、もっと面白そうだ』といった考えや、『○○ってどんな話なんだろう？　こういう話かな？』といった無知からのイメージも含む。だからいくら作り話と言っても、現実に干渉しているものならば、我々神が手を加えないわけにはいかないのだ」

……納得はできたが、やはりとんでもない話だな、と思う。というか、こいつら神が因果律の調整をしなければ二次創作との区別も付かなくなるだなんて……。
俺がいままで好きだったマンガとかアニメとかも、本当にオリジナルのものだったのか不安になってきた。
ていうか……。

「ずいぶんと文化的な神様なんだねー、あんた」

「……なんだ？　なにが悪い？　神がアニメの世界を司っているの

がそんなに滑稽か？」

あ、あれ？　なんか逆鱗に触れた？　俺？

「……そもそも当時、認知度がまだ薄かったマンガから京〇ニにアニメ化されるよう仕向けたのはこの私だぞ……。おかげで原作ファンでもなかった大衆の心を掴み、いちやくベストセラーになった……。いまでは現代アニメを代表する人気アニメに伸し上がり、ＣＤだってランキング上位に入るほど、そしてなんと今度は映画化！　ハリウッドだって夢じゃない！　文化遺産として指定されるのもそう遠くはない！　はははっ！　見たか！　私に雑用のごとく『けいおん世界』の管理を押し付けた上位神め！　『マイナー作品だから管理楽でしょ？』と語尾に草生やして嘲笑したが、どうだ！　いまでは『ド〇えもん』や『サ〇エさん』や『ポ〇モン』と並ぶ後世に伝わる神作品と化したぞ！　ふはははっはははは……げふっ！　げふっ！　げほっ！　本当大役だ！　ランクアップは間違いない！　ゼウス様やラー様やオーディン様やイザナギ様のように私も神話の仲間入りだ！

ざまーみろっ！　マイナー作品を管理している先輩神どもめ！　私が先に出生しちゃってサーセンだ！　あっはははははははははははははははは！！」

「……わかった。悪かった。別に馬鹿にしたわけじゃないんだ。うん、あんたがここまで頑張らなければ俺も『けいおん！』と一生出会えなかったかもしれないし、ここまで好きになることもなかった。うん、だからあんたすごいよ。本当に感謝してるよ。だから泣きやんでくれない？　さっきから怖いから……」

いつのまにか再び巨大化して、泣きわめくけいおん神。おかげで涙の雫が豪雨と化して周りと俺の体をびしょびしょにする。てか水圧

ありすぎて痛い。

「……わかってくれる？　本当にここまで来るのに苦労したんだよ……」

「ああ、あんたも大変だったんだな」

落ち着いたのか、また小さくなって正座するけいおん神。俺もなんとなく正座になって対面する。その後、俺は『けいおん！』の魅力について盛大に語り、けいおん神に同志として認められ固い握手をした。

「さて、これからのお前の処遇に関してだが……」

「あっ……」

そうか、すっかり忘れていたが、俺死んでるんだった。

「どうだ？　お前の未練、叶えてやってもいいぞ？」

え？

「『けいおん！』の世界でリア充になりたいんだろう？　未練ある魂を救済するのも私の役目だからな」

「叶えるって……どうするんだ？」

「転生さ。お前、『けいおん！』の世界に転生してみないか？」

プロローグ（後書き）

プロローグというよりは説明ばっかだったな……。
次もまだ神との対談です。モブ娘が出るのは2話目になります（遅いなぁ……）。
拙い文と更新も不安定ですが、感想があれば頑張れます！
すみません。媚びました……。
意見、感想、改善点がありましたら遠慮なくよろしくお願いします。

第一話「転生！」（前書き）

あれ？　プロローグと大して内容変わらないか？

第一話「転生！」

「お前、『けいおん！』の世界に転生してみないか？」

転生。

死んだ後、またなにかに生まれ変わるという概念。

これは再び生まれるという意味の「再生」ではなく、再び存在する「再有」という語を使うらしい。　主に仏教に見られる概念だが、古代ギリシャの宗教思想にも「転生」についての散見が認められている。

だがけいおん神が言っている転生は少し違う。

漫画やアニメの世界に現実の人間がオリジナル主人公として原作の世界に行くという二次創作におけるジャンルのことだ。つまり二次元に行きたいという願望の究極体と言える。

「えっ？　ちょっ！　マジで？　マジで『けいおん！』の世界に行けんの！？」

「私を誰だと思っている？　けいおん世界を司るけいおん神だぞ。人の魂をけいおんの世界に転生させることなど容易にできるわ」

「……き」

「ん？」

「転生キタ――――――――――――――――――っ！！」

あまりの嬉しさでその場で踊り、舞い、側天する。だってそうじゃん！　ずっと憧れていた「けいおん！」の世界に行けるんだぞ！？

主人公として！　マジ俺勝ち組じゃないか！
うおおお！！　燃えてきた！　ようし！　主人公補正で軽音部員の皆にフラグ建てまくってやる！
特にムギとか、ムギとか、ムギとか、ムギとか、むぎゅううううううう！！

「ああ……喜んでいるところ悪いが……」

「おお、なんだ？　あっ！　そうか！　『けいおん！』に原作介入するには音楽の能力が必要だよな！　ようし！　けいおん神！　俺に音楽の才をくれ！」

楽器と言えばリコーダーしか経験ないからな～。ちなみに楽譜もまったく読めない。唯のように絶対音感なんてチート能力もない。
ここはご都合主義とも言える神の力で音楽の才能と知識を提供してもらうしか……

「いや……あのな、お前原作介入できないんだよ」

……はい？

「つうか、メインキャラとも関われない」

……顎が外れるのではないかというぐらい口が開く。特に意味はないが首を動かして周辺を見渡す。はやり白くて白～～い景色しかない。まぁ綺麗～うふふ……。
さやかな笑顔で再びけいおん神に視線を向ける。

「こっち見んな」

「待ていっ！　なんだそれ!?　原作介入できないって！　なんのための転生だよ！　えっ！　メインキャラとも関われない？　俺とムギのハッピーライフは!?」

主人公補正は？　チート設定は？　ご都合主義は？　ハーレムは!?

「しょうがないんだよ……。最初にも言ったが、ここに来れる魂は、普通なら私が選んだ人間だけ……つまり、主人公になるのに相応しい素質を持った人間だけを呼ぶんだ」

主人公の素質？

「もともと原作にいないはずのキャラクターが原作に関わって話を変えるっていう行為は因果律を狂わせるからな。そういうことにならないために転生させる人間には神の力を少し分けるんだ。そうすると向こうで原作介入して話が変わっても、お前が言う主人公補正で自動的に因果律の歪みを調整するんだ。するとその『けいおん！』の世界は原作にはない『ＩＦ』の世界になる。オリジナルとは関係ない、別の世界として進行していくんだ。

……だがなぁ、この神の力というのは誰でも許容できるわけではないんだ。ほんの一握りの人間だけしか使えないのだよ。

神の力を取り込める人間＝主人公の素質を持つ人間。原作介入することが可能な才能と素養を持つ、未練のある人間の魂……これを私が選定し、ここに呼び、転生させる。普通ならこれがセオリーなのだが……」

ええと……つまり……

「残念だが、お前に主人公の素質はまったくといって、ない。行ったとしてもせいぜいモブキャラなんだよ」

……こうはっきり言われますと、なにも言う気が起きない……。

「自力でここに来れるだけで十分なイレギュラーかと思ったんだが……、いかんせん特出したものがないなぁ。どうやらただの執念だけでここに辿りついたみたいだな……。逆に大したもんだ」

かっこ悪すぎじゃないそれ……？

「ま、待ってくれ！　もしかしたらその神の力とやらを奇跡的に許容できるかもしれないよ！？　俺！　やってみないとわかんないじゃん？　ねえ！？」

「……やってみてもいいが。許容できなかったらお前、『ＡＫ〇ＲＡ』に出てくる鉄〇の暴走状態みたいになるが……それでもやるか？」

「すいません。やっぱいいです」

いまだにトラウマなんですアレ。

……しかし、主人公になれる人間っていうのは、もとから才能があって神に愛されている次元の違う人間のことだったのね……。

「つかモブキャラって……転生する意味ねえじゃねえかよ……」

「なにを言っている？　むしろ好都合じゃないのか？」

「えっ？」

「思い出せ。アニメの『けいおん！』に登場するクオリティ高いモ

ブキャラたちを」

ああああああああああああああっ！！　そうだよ！　「けいおん！」の隠れた名物、モブキャラを失念していた！

「けいおん！　モブキャラ」について説明しよう。

本来ならアニメにとって背景であるところのモブキャラだが、京○ニの細かいところまで手抜きをしない恐るべき技術力によって生み出されたモブキャラたちは、総じて容姿のクオリティが高く、個性があり、隠れたファンがいるほどなのだ。

第二期ではかなり描写が増え（特に唯たちのクラスメイト）、名前も設定も決められ、セリフまであるのだ。

第一話からネット上で話題になり、「特定班」と呼ばれる猛者たちが、公式発表の前に名前を明らかにしたり、登場シーンをまとめたり、最終回の色紙に書かれた一人の一人のメッセージまで調べられるほどの注目を浴びる。

いまでは、モブに関連する動画、モブ専門の絵や同人誌まで出ているほどだ。モブにするにはあまりにもったいない！　言わば「けいおん！」の裏のアイドル！

「お、おい！　俺がモブキャラということは、二期に登場する三年二組のモブキャラの女の子たちとは関わることはできるよな！？」

「モブ同士だからな。もちろんできるぞ」

「フラグ建てられるか！？」

「それは……お前の頑張りしだいだな、うん」

「深い関係になれるか！？」

「報われればな……」

「つ、つまり恋人になれる可能性があるってことだよな！？」

「あ、ああ。だからお前の頑張りしだいだ……って、近い近い」

お、おお！　軽音部にフラグ建てることしか頭になかったが、モブキャラたちだって十分魅力的な女の子たちじゃないか！　確かにムギと恋人になれないのは辛いが（いやほんと）、それに目を瞑れるほどの幸福が待っているかもしれないではないか！

ようし！

「けいおん神！　決めたぜ！　やっぱ『けいおん！』の世界に行ってモブたちとウハウハな生活を満喫してやるぜ！」

「どうどうと言うことじゃないと思うがな……。まあ決心できたらのならいい。せっかくの二度目の人生だ。大いに楽しむがいい。ああ、言い忘れたが、『桜ケ丘高校』は女子高ではなく、最初から『共学』という『ＩＦ』設定のけいおん世界に送ってやるからな」

あっ、そっか。共学じゃないとモブキャラたちと知り合えないもんな。

「あれ？　でもそれって原作を大きく変えていることにならないか？」

「そこはもうすでにオリジナルと独立した『けいおん世界』だから心配ない。

他にもバトル要素がある『けいおん世界』、ファンタジー要素があ

る『けいおん世界』に送ることだってできるんだが……まあこんなに原型留めていない世界に行けるのはよほどの転生者だけだな。ま、どこに行ったとしてもお前はモブだ」

ああ、そうですかい……。

「それに、『共学』程度の設定変化の調整ならもう慣れている。ほとんどの二次創作が共学設定だからな。『共学』という要素がある『ＩＦ』のけいおん世界にお前を混ぜて、因果律が狂っても、すぐに修復できる。……普通は転生者が勝手に修復してくれるから、私は楽できるはずなのだがな……」

「すいませんねえ～、主人公になれない器で……」

「……あと、転生させる前にお前には話さなければならないことがいくつかある」

えっ？　まだなんかあるの？

「お前にはいくつか条件……いや、制限が与えられる」

おいおい。ムギと関われないだけでも辛いのに、これ以上制限あるのかよ……

「さっき、お前はメインキャラと関われないと言ったが、正確に言うと“関わってはならない”と言うべきだな」

「関わってはならない？」

「神の力を持つ転生者が原作介入し、話を変えたら『ＩＦ』の世界

が発生すると言ったな？　だが神の力を持てないお前はそれができない。つまり、モブであるお前が本編のシナリオに関わり、話を変えてしまうと、そのけいおん世界の因果律が大きく狂ってしまうのだ。お前がこれから転生する世界も、『共学』という変更設定があるだけで、原作に限りなく近い世界だ。その世界も例外ではない」

「ああ、そうか……。ん？　ちょっと待て。モブが本編に関わっちゃいけないって言うが、モブが軽音部に接触している話だってあるぞ」

とくに「部室がない！」ときの回や文化祭なんてモロに話に関わっている。

「いや、それは元からモブが関わるというシナリオになっているからだ。簡単に言うと、ドラマで必要な配役として登場しているんだ」

ああ、なるほど。だいたいわかってきた。
要は、「けいおん！」という物語が一つの撮影ドラマとしたら、本編の撮影中にいないはずの配役……つまり俺が入ってはならない。そしたらＮＧでカットされてしまう。
その「カット」という現象が、因果律の崩壊というわけだ。

「なんかそう聞くと、『けいおん！』のキャラクターってシナリオ通りにしか動かない人間のような気がするけど……。えっ？　まさかＲＰＧのキャラクターみたい決められたセリフしか言わないなんてことないだろうな？」

いくら話しかけても、「先生、サヨナラ」としか言ってくれないなんて虚しすぎるぞ！

「んなわけあるか。『けいおん世界』のキャラクターたちはモブも含めて独立した存在だ。そうじゃないと『ＩＦ』の世界が発生しないだろう」

よかった。それを聞いて安心した。

「あれっ？　でも、俺がシナリオの配役として登場できないってことはさ。本編が始まったら一言も話しちゃいけないってこと？」

「だから何度も言わせるな。要は本編のシナリオを変えなければいいんだよ。モブは背景なんだから、背景キャラが会話してたって声は拾われない。まあ例外としてモブが配役として発言しているときにお前が話しかけるのはダメだがな。
とにかくメインは軽音部なんだから、モブがピックアップされることはない。安心しろ」

……そういう言い方はなんかひどいような気もするが、まあモブなんだもんな、俺。

「じゃあ、お前が守るべき制限をまとめると……
１、軽音部を始め、メインキャラとサブキャラに関わってはならない。
２、本編のシナリオを変えてはならない。
３、配役として登場しているときのモブに話しかけてはならない。
特に３は注意しろ。うっかりお前が本編に登場するとそれだけでアウトなんだからな。あくまでモブらしく背景に徹しろ。
これを守らないと、そのけいおん世界は大変なことになる……。私だってすべてサポートできるわけではない。取り返しのつかない状態になってしまったら、私でもどうすることもできない」

言い訳ではなく、本当に限界があるという態度だった。
いくら神でも万能ではない、ということか。……いや、「万能の神」という概念自体が、俺たち人間が造った勝手な思い込みなのかもしれない。そんな都合のいい存在は、もともといないのかもしれない。

「……わかった。気をつける。しかし……本当、『けいおん！』そのものにはまったく関われないわけですね俺は……」

「まあ、これさえ守ればあとは自由だ。好きにやれ」

「もち！　モブキャラの間で俺はリア充になってやるぜ！」

「よし。それじゃあ転生の準備をするが、本当にいいんだな？　二度目の人生を送ることに後悔しないか？」

からかいではなく、真剣に聞いている空気がひしひしと伝わってくる。
だから俺も真剣に考えるが、答えはすでに出ている。

「『けいおん！』の世界に行けるのに、後悔なんてするはずないだろ？」

それに、いまさらあんな闇の中に戻って、徐々に消えていく方がずっといやだ。

「よろしい。では……行ってこい。モブの中のモブよ」

白い世界で新たな色が含まれる。けいおん神の手から虹色の光が現れたのだ。
その光が俺を包む。そして、遠い遠い先に俺を運んでくれている感

触を肌で感じる。
とても暖かい、心地良い光だ。
自分が胎児のころを覚えてはいないが、母親のお腹に入っているような安らぎがあった。気持ちの良い眠気とともに俺は意識を閉じた……。

「おんぎゃあああ！　おんぎゃおんぎゃあああああああっ！」

って、転生なのでもちろん赤ん坊の状態からスタートである。

「見て、アナタ。元気な男の子ですよ」

「おお！　猿みたいにやかましい元気な子だ～！　しかし可愛げがない！　さすが我が息子だ！　血は争えんなぁ！　がはははははははははははははははは！！」

なんか、だいぶキャラの濃い人の間で生まれてしまった気がするが、俺の第二の人生はここから始まるのだ。

俺はモブとしてしか生きられない。だがモブはモブの間で輝けばいいのだ。メインキャラになれないからと言っても、充実した生活はできるはずだ。

俺は無事にやってきたこの「けいおん世界」で高らかに宣言するのだった。

「おぎゃ～ぎゃぎゃ（モブ王に）、おぎゃぎゃぎゃっぎゃう（俺はなる）！」

とりあえず、早いとこ赤ちゃん時代を終わらせたい……。

第一話「転生！」（後書き）

ようやく転生しました。
次回ようやくモブ娘の登場です。
ご意見、ご感想待ってます！

第二話「幼馴染！」（前書き）

ようやくモブ娘登場です！
先陣を切るのは……

第二話「幼馴染！」

俺が「けいおん！」の世界に転生してから、早くも五年の歳月が経った。
この世界で俺が授かった名は「小野光真（おのこうま）」。現在、五才。精神年齢は聞いちゃダメ。

さてなぜ赤ん坊時代からいきなり五年経っているのかというと、俺にとってあの時代は早く忘れ去りたい黒歴史だからである。
頭の中は大人だというのに小便大便が一人でできず、飯も誰かに食べさせてもらうしかない。赤ちゃんプレイなんてものがあるらしいが、それを一年間続けたらたまったもんじゃない。というか、泣かなきゃなにも伝えられないとは、なんと不便なことか。
俺は自らの脳が幼児に退行しないよう自我を保つことに労力を一生懸命費やした。なんともハードな年月だった……。

しかし、いいこともあった。俺の母親……小野明子（あきこ）というのだが、これがとんでもない美人で性格もよく家事も得意な良妻賢母なのだ。
この人の……まあ、赤ん坊だからこそ許されるアレを含んだときは役得というか、ラッキー☆　と歓喜してしまった。
血のつながった母親なのが少し残念だったりする。
しかし、女神のような母の旦那がどうしてあんな男なのか……。
……父親に関してはまた近いうちに話そう。ちょうどお客さんが来たようだし。

「コウく～ん」

俺の部屋に入ってきたのは、俺と同い年のおさげ髪の女の子。お隣

の木村さん家の一人娘で、幼馴染である木村文恵だ。
そう、あの「生焼けおさげ」こと木村文恵は俺のお隣さんなのだ。
三年二組のモブキャラたちと関わるのは最低でも高校入学してからと思っていたのだが、それは杞憂に終わった。まさか幼馴染として、さっそくアイドルモブと出会うとは思っていなかったが。
ちなみに「生焼けおさげ」の由来は、アニメ第一期の文化祭で、唯のクラスが焼きそば屋をやっていたとき、ブレーカーが落ちて「生焼けになっちゃう」と言ったことから。
そういえば文恵って二期にも登場したのに、一期しかセリフないんだよなぁ……可哀想に。

「おう、どうした文恵？」

「明子さんがね、アップルパイ作ったから食べようって。一緒に行こう？」

「よっしゃ！　母さんのアップルパイー♪」

お隣ということもあって俺と文恵は毎日のように遊んでいる。
高校生の文恵も可愛いが、幼い文恵も可愛いのなんの。癒しを感じさせる物腰はすでにあって、俺の心のオワシスとなっている。こんないい子と幼馴染ってだけで転生してきた甲斐があるというものだ。

「どうしたの？　コウくん。私の顔なにかついてる？」

「あっ、いや、文恵は可愛いなぁ～って思って」

「えっ！　あ、ありがとう……」

ついつい顔を凝視してしまってとっさの言い訳――いや本音なのだ

が――を言ってしまい、顔を紅潮させる文恵。

「ほんと可愛いなぁ。文恵は～」

あまりの愛らしさに文恵の頭をナデナデする。

「も、もうからかわないで！　はずかしいよぅ！」

プンプンと怒ってしまう文恵だが、残念ながらその仕草さえも可愛いらしい。

まあ、これ以上からかったら本当に嫌われてしまうから、この辺で自重しておこう。

「ごめんごめん。ホラ、アップルパイが冷めちまうから行こうぜ」

手を差し伸べて文恵に謝罪する。母さんの作る料理やお菓子はなんでも上手いが、特に俺はアップルパイがお気に入りだ。出来たてのうちに食べたい。

「う、うん」

ぎゅっと俺の手を握ったとたんなぜか笑顔になる文恵。これは、まさか……

（早くアップルパイが食べたかったのか？　文恵も食いしん坊だな）

なぜだか、白い空間にいるけいおん神が呆れの溜息を吐いたような気がした。

その後も、俺と文恵はおままごとや、一緒に絵本を読んだりとか、

年相応の遊びをし、幼馴染イベントの記録を増やしていくわけだが、実に頭を悩ます事態も起こるわけだ。

文恵は生まれてから五年の歳月しか経っていない。まだ善悪の区別が付かない無邪気な子どもだ。

だが俺は違う。肉体は五才だが、中身は立派な大人だ。つまり羞恥心の差がある。それが最も顕著に表れるイベント。

一緒にお・フ・ロだ。

「ねえ？　なんで一緒に入っちゃダメなの？　泥だらけなんだから二人で入ろうよ」

公園で砂遊びした俺たちはお互い泥んこで汚れていたので、母さんに風呂に入るよう言われたのだ……。

泥んこで頬を汚している文恵はまだ羞恥心がないお子様。だが俺は顔だけではなく、心まで汚れきっちまっている邪念の持ち主。幼女文恵の裸体を見てしまった日にはどうなってしまうことか。

いや、別に幼女趣味があるわけではないよ？　問題は相手が文恵ということだ。

将来の成長姿をすでに知っている相手の成長過程にある未熟な肉体を見るというのは、なぜだかとんでもなく背徳的な罪悪感が湧く。

「いや、だって俺は男。文恵は女の子だし、一緒に入るのはおかしいだろ？」

「でもコウくん。『光真はよく明子さんとお風呂に入って鼻の下伸ばしてる』っておじさんが言ってたよ？」

おぉぉぉやぁぁぁじぃぃぃ！！

五才児の女の子になに言っとんねん！　いや事実だけどね！
だってまだ五才だもん俺！　親と一緒に入ったっていいじゃないか！　べ、別に下心があるわけじゃないよ！　一児の母にしては若い肌だなぁ、とか思ってないもん！
えっ？　親父とは入らないのかって？　いやだよ。

「女の人の明子さんと入っているんだから、私と入るのも同じでしょ？」

うぐぅ……。子どものくせに合理的なこと言いおって。

俺は理性をフル動員させ、ぐずる文恵を説得したが聞かず。
結局「私のこときらいなの？」と泣きだしてしまった文恵に、慌てて「水着ならＯＫ」と言ってしまい、一緒に入ることになった。そのときのイベントは母さんが写真に撮って、アルバムに張られることになる。

「このときからコウくんって、子供のくせに変に嗜(たしな)みがあったよね～」

とアルバムを見ながら顔を赤くする文恵に感謝の言葉を贈られるのはまだ先の話。

季節は流れる。
幼稚園や小学校で過ごした時間は、楽しさ七分、悲しさ三分といった感じで、走馬灯のように過ぎてしまった。
もともと俺は学校のような集団行動を強制させられるような環境は好きではなかった。前世はそのひねくれた性格のせいでいろいろ苦労や損をした。
だから第二の人生ぐらいは素直になって子ども時代を満喫しようと

思ったのだ。なにより、文恵がいつも傍にいてくれたおかげで、毎日は充実していた。

文恵との関係は中学校に上がっても良好だった。普通異性の幼馴染同士がこの年になると、周りの目を気にして疎遠になってしまうものだが、俺と文恵はそういった恥ずかしさは特になかった。

けれど、日々女性っぽくなっていく文恵を見ていると、どうしても異性として意識せざるを得ない。それは文恵も同じようで、昔のように遠慮のないスキンシップというのは出来なくっていった。まあ、それでも仲のいいことに変わりはない。たま～にケンカすることもあるが、それはお互い心を許し合っているからと言えよう。

基本的に謝るのは俺だけどね……。

ああ、ちなみに平沢唯と真鍋和は幼稚園からずっと同じところに通っている。もちろんけいおん神の言いつけを守って、接触はしていない。まあ、あの二人の回想シーンに入り込むことに注意すれば問題なかろう。

しかし、傍から唯を見ていると本当に変わり者だなと思う。というより天然の領域を超えている。あれでよくいじめに遭わないものだとつくづく思う。普通なら浮いてクラスからハブられるもんだが……。

文恵曰く「いつまでも小さい子どもみたいでかわいい」とのことだが、決して誉め言葉ではないと思う。

本編の主役である奇想天外な平沢唯の成長記録を遠目で観測しつつ、モブの身分である自分の小ささを悲しみながら、超常現象も起きない平和なけいおん世界は回っていく。

でもって、ただいま体育の時間。項目は体育館でバレーボール。ちなみに女子とは合同。半面を使ってクラス交代形式でやることにな

っている。いまはネットを用意したり、得点板を運んだりと準備中だ。
俺はネットを結び終えたところで、体育用具倉庫室からボール入れを押して運んでいる文恵の姿を確認する。

「お～い。手伝うぜ文恵」

「あっ、ありがとうコウくん♪」

うむ。ブルマ姿がとても輝かしく似合っているな文恵。
そんな格好で笑顔を返されると、つい鼻の下が伸びてしまう。ブルマから伸びる健康的な生脚が実に艶めかしい。

「……なんか視線がやらしいよ？　コウくん」

「い、いや～！　そんなことないぞ！　ごほん！　ていうか、こんな力仕事、体育委員に任せればいいのに」

文恵は献身的というのか、他の奴が面倒に思うことを率先してやるタイプなのだ。そこが魅力で好かれる要因になっているのだが、正直いいように使われていないか心配である。

「あっ、文恵ちゃ～ん！　こっちにボール一つちょうだ～い！」

女子が使っている半面コートから、女子二人組が文恵に手を振る。

「うん。行くよ～！」

両手を上げひょいっと、いかにも女の子らしい投げ方でボールは飛んでいく。フォームはバレー部員と比べるとご立派なものじゃない

が、ボールは空中で綺麗な孤を描き、ばっちり女子の手に渡った。
ありがとう～とお礼を言っているが、今運んでいるんだから、もうちょっと待っていればいいのに……。

「……ねえねえ。やっぱり文恵ちゃんと小野くんって付き合ってるのかな？」

「うんうん。いつも一緒だもんねえ～。なんかラブラブって感じ？」

きゃあきゃあ、と勝手に盛り上がる先程の女子二人組。本当、女の子って恋話好きだよな～。けれど、できれば本人たちがいないところでやってほしい。
ほれ、文恵が顔を真っ赤にしてしまったではないか。

「気にすんなよ？　あんなの」

「う、うん……」

……しかし、転生したばかりの頃は、三年二組のモブキャラたちにフラグを建てよう、などという野心に燃えていたが、いまは心境の変化が起きている。
すなわち、このまま文恵と恋人になれるのではないか、という考えが頭を巡っている。
文恵とはこっちに転生してからずっと一緒だった。彼女のことはきらいじゃない……むしろ好きだ。けれど、どうだろう。そんな簡単に告白して付き合っていいものだろうか。

もう一つの心境の変化は、モブキャラたちに対する見識の変化である。
俺はいままで画面越しの存在だった彼女たちを、言ってしまえばギ

ャルゲのような攻略対象の女の子としてしか見ていなかった。
だがいまは違う。いまここにいる木村文恵という女の子は一人の人間だ。けいおん世界に転生した時点で彼女たちはフィクションの存在ではなく現実の存在だ。そのことを失念していたのである。
文恵といなかったら、そんな当たり前のことすら気付かなかったかもしれない。彼女たちを都合のいい存在として扱っていいはずがなかった。

だから、俺の一時かもしれない気持ちを押し付けて、文恵を傷つけるようなことはするべきではないし、したくなかった。なにより大事なのは文恵自身の気持ちだ。
文恵は大らかというか、断ることが苦手な女の子だ。俺が告白したとして、本当はいやなのに了承してしまうかもしれない。

「なあ、文恵っていま好きな奴とかいるか？」

「えっ！？」

だから少しでも、文恵の本心が知りたかった。

「ど、どうしたの？　急に」

「あ、いや。俺たちよくカップルって噂されるじゃん？　もし文恵に好きな奴がいたら、迷惑になるんじゃないかなと思って……」

そう言った瞬間、文恵は悲しそうな顔になって俯いてしまった。
ええ！　なんで！？　まずいこと言いましたか俺！？

「……コウくんは、ああいう噂、迷惑なの？」

「えっ？」

「わ、私と恋人同士って言われるの、いやなのかな？」

若干、潤んでいる瞳で俺を見つめる文恵。

なんかドキドキ。

「あ、いや！　そんなことはないぞ！　ただ文恵はどうなのかなって気になっただけで……」

「そっか……」

今度は安心したような表情になって、笑みを浮かべる。

「私は、別に迷惑じゃないよ。ああいう噂されるの……」

「えっ？」

そ、それって、まさか文恵は俺のことを？　そんな幼馴染のお約束が成立しているとでもいうのか！？

「ふ、文恵……」

文恵に手を伸ばそうとしたそのとき……バシーーーーーーンッ！

！　とバレーボールが剛速球で俺の横顔に直撃した。

「コ、コウくん！？」

「おお！　和ちゃん和ちゃん！　私スパイク打てたよ！」

「ラインの中に入れなきゃ意味ないでしょ？」

遠くから聞こえてきたのは興奮してはしゃぐ平沢唯と冷静なツッコミを入れる真鍋和。

つか人にボール当てといて謝罪はないのか？　モブか？　モブだからか？

「コウくん！　しっかりして～！」

その後、軽い脳しんとうで保険室に運ばれて、俺はしばらく気を失っていたらしい。

結局、あのとき文恵の気持ちを確認することは、それからはうやむやになってしまった。

けいおん神よ。俺はメインキャラの邪魔はしていないが、向こうが俺の邪魔をしているぞ？

第二話「幼馴染！」（後書き）

というわけで木村文恵ちゃんの登場回でした。
彼女の印象は一期からのものですが、表現できているのかどうか……。
ご意見、ご感想よろしくお願いします。

第三話「受験！」（前書き）

クリスマスなんてなくなればいいんだぁ！
三話目です。文恵ちゃんは心のオワシス。

第三話「受験！」

早いもので、中学三年生になった俺達には受験という避けられない大イベントが到来した。
受ける高校はもちろん桜高だ。けいおん神の言う通り、ちゃんと女子高から共学ということになっている。
だが元はやはり女子高だったらしく、受験する男子の比率は女子と比べて低いらしい。

「あんまり男の子の友達できないかもしれないよ？」

共に桜高を受ける文恵は、そのことを心配しているようだった。

「じゃあ女の子の友達百人作ってウハウハになる」

「もう……」

場を和ますジョークとわかっているのか、本気で呆れているわけではないようだ。
ただいま俺の部屋で、文恵と受験勉強中だ。
文恵は最近、受験に対する緊張と勉強の焦りのせいなのか、少し疲労の色が窺える。俺が冗談を言っているいまでもペンを休めず、問題を解いている。

（焦る気持ちはわかるが、無理はしてほしくないな）

とか言う自分も他人事ではないのだが。

（桜高ってやっぱ難しいんだなぁ。こんなに苦労して勉強することになるとは……）

よく唯と律が合格できるもんだ。そういえば大学入試も三年の後半で勉強し始めたにも関わらず受かったんだよなぁ……。普通ありえねぇって……。それもメイン補正とでも言うのか？

コンコン！

「は～い」

「お茶持ってきたわよ。少し気分転換したら？」

母さんが紅茶とサンドイッチを持ってきたので、お言葉に甘えることにした。

「二人とも。がんばることも大事だけど、詰め込みすぎて体を壊した方が問題なんだから、ちゃんとこまめに休憩とるのよ？」

「あいよ」

「は、はい。ありがとうございます」

多分、母さんは遠まわしに文恵に注意してるんだろうな。
さすが母さんだ。文恵が無茶してまで勉強していることに気付いている。
逆に俺は勉強時間より休憩時間の方が長いで～す♪
……みなまで言うな。わかっている。このままじゃマズイのは……。

「よろしい！　それじゃ、しっかりね？」

母さんは心から安心させてくれる笑顔を見せて部屋を出て行った。

「明子さんって、いつまでも綺麗だよねぇ？」

「だよなぁ。十五歳の子どもがいるとは思えないぜ」

なんせ俺を生んだときから、まったく容姿に変化がないのだ。美人な母を持つ身としてはいつまでも綺麗でいてほしいが……もしかして母さん不老か？

というより自分は母の年齢すら知らない。母親とは言え、女性に年を聞くのは失礼だと思っていたので、聞く機会がなかったが……

……親父。まさか犯罪じゃないだろうな？

「どうしたの？　コウくん」

「いや……なんでも」

とりあえず母さんの若さの秘密について考えるのはよそう。なんか危険なにおいを感じるし、才色兼備な母に不満はないしな。

（しかし、本当になんであんなにすばらしい女性の相手があんな男なんだ？）

そんな俺の思考が奴を呼び寄せたのか。または近づいているが故に俺の脳内に浮かんだのか。

ドドドドドドドドドドドドドドドッ！！　と階段を速足で昇って、こちらに接近してくる轟音が耳に響いた。

これは、まさか！　アイツか！？

バアアアアアンッと乱暴に開け放たれたドア！　その前に君臨する巨体の男！

「コウの字～～！！　ただいま～～！！　パパだよ～～！！」

俺の父。小野光輝（こうき）がそこにいた！

いやあああああああああ！　やかましいのが帰ってきやがったよ～～！

顔だけ見ると威厳たっぷりなラ○ウのような面構えをしているというのに、口を開くとハイ！　残念！　と叫びたくなるぐらい口調が陽気で、アンバランスな声を持つこの男が俺の父で母さんの夫なのだ！　世の中理不尽だ～！！

「おお～！！　文恵ちゃんも来ていたか！　いらっしゃあああい！！」

「お、お邪魔ましています。おじさま……」

「いやあ、仕事が忙しいせいでしばらく会ってなかったねえ！　いつのまにかこ～んな美人さんになっちゃてぇ！　小さい頃からかわいかったから予想はしていたがねぇ！　まったく光真もいい娘さんに唾つけたんもんだ！　来年は花も恥じらう女子高生かぁ！　うんいいねぇ！　この響き！　女子高生～！　おお！　そういえば女性は十六歳で結婚できるではないか！　光真！　安心しろ！　式の準備はパパに任せ……お～っと！　お前は十八歳じゃないとダメじゃないか！　いやあはははは！　失念！　失念！　まあ二年の歳月ぐらい我慢しなさい！　ただし避妊はちゃんとしろよ！？」

「どこまで話飛んでんだよ！！　つかいきなり帰ってきてマシンガントークかましてんじゃねーよ！！　話の半分ほとんどセクハラだ

し！！　こちとら受験勉強でピリピリしとんじゃあぁぃぃ！！」

まったくなんでこの人は久々に帰ってきては、こうぶっ飛んだ話を一呼吸もおかずベラベラしゃべるのか。こんなんでも仕事ができる人だから余計にタチが悪い。

ちなみになんの仕事をしているのかは知らない。ただ出張がかなり多く、帰ってくるのは稀だ。

親父曰く「ミステリアスな男の方がイケメンだろ？」らしい。

そして、俺は親父をかっこいいと思ったことは一度だってない。

つか変なこと言うせいで、純真な文恵が湯でダコみたいになってるぞ！

「なんだ？　なんだ？　父親が息子と義理の娘の幸せを願ってな～にが悪い？」

「文恵は義理の娘確定かい！」

「あぁん？　お前はこんないい子に不満があるというのか！？」

「不満とか満足とかの話じゃなくて、文恵の気持ち考えろっての！」

「ほう……。お前はそう言うが、お前自身はどうなんだぁ？　文恵ちゃんのことどう思っているんだぁ？」

「は、はぁ？」

な、なに言いだすんだ突然！　本当に親父は！　文恵だって困って……

じ～～～～～～～～～～っ

超ガン見しています！

さっきまで湯でダコだったのに回復早いなオイ！

「さあ。どうする？　この期待の眼差しを前に逃げるのかお前？　ん～？　ほら！　はっきり言っておしまいなさい！」

こ、このクソ親父！　余計なこと言って追いつめやがって！

「お、俺は……」

こ、これは答えによっては俺の未来確定しちゃうのだろうか？　どうなの！？　けいおん神！　桜高に入学する前に俺のモブ人生がゴールインしそうです！

「さあ！　思いの丈をいまここでぶちまけてしまえ！　さあ！　さあ！　さあ！　さあ！　さあ！　さ……」

「光輝さん。受験勉強の邪魔しちゃいけませんよ？」

いつのまにか親父の背後に立っている母さん。そしていつのまにか床に昏倒している親父。

なにしたんだ！　母さん！？　ますますあなたの謎が増えましたよ！？

「文恵ちゃん。騒いじゃってごめんなさいね？　この人も悪気があるわけじゃないの。ただスキンシップのやり方がずれているだけで」

ずれ過ぎだ。

「は、はい。よく知っていますから、気にしないでください」

「ありがとう♪　じゃあがんばってね？」

と言って、親父のシャツの襟元を掴み、引きずって部屋を出ていく母さん。いいザマだクソ親父。

「あっ、ちなみに私も二人の仲には賛成よ♪」

母さ～ん！　最後に爆弾投下して行かないで～！！

「……」

ほら、気まずくなってしまったではないか……。

「あ、あの……文恵？」

「……よ」

「えっ？」

「そろそろ勉強しよ？　ねっ！」

「あっ、ああ……」

と言いつつも、結局その日は問題が頭に入りませんでした……。

しかし、試験は待ってくれない。

講習と学校の先生に出された数々の難問を解き過ごす日々、いよい

よ試験当日となった。
き、緊張しますなぁ。前世で受験の経験をしていても、この緊張には慣れない。

「ふ、文恵、大丈夫か？」

「う、うん」

桜高の正門で立ちつくし、緊張をほぐそうとするがお互いなかなか落ち着けない。

「そ、そうだ！　唯ちゃんに聞いたんだけど、手にカボチャって書いて飲み込むと緊張しなくなるって……」

「文恵！　それカボチャちゃう！　書いて飲み込むのは『人』や！　カボチャは『お客さんがカボチャ』やろ！？」

油性ペンで手のひらにカボチャの字を書こうとしている文恵を、なぜか関西弁で阻止する。緊張のせいで少々冷静さを失っているようだ。
ていうか唯！　文恵に変なこと教えんといて！

大丈夫かなぁ……。
自分のことより文恵が心配だ。

だがこれまでちゃんと勉強してきた分、本番では落ち着いて問題が解けたようだ。
で、俺はと言うと……

「もうおしまいだ～！　あの問題は間違いみたいだし、あそこもき

っと間違ってるだろうし！　もういやだ～！　ぼくお家帰るぅ～！」

「とっくにお家だよ」

自室の床でごろごろ転がり、絶賛反省中だった。
試験の後って、急に冷静になってあれこれ考え込むんだよな。

「ほら元気だして？　コウくん。前半の問題はスラスラ解けたんでしょ？　なら大丈夫だよ！」

「そうかな……」

「そうだよ♪」

……うむ。文恵にそう言われると本当に大丈夫な気がしてきた。
やっぱり文恵には相手を安心させるような力を持っているな。
……手にカボチャ書こうとする慌てんぼさんだけど。

「ふぅ……よし！　反省タイム終了！　やれることはやったんだ！
後は堂々と結果を待っていればいい！」

「うん。そうだね」

「そうと決まれば、心置きなく羽目を外すか！　ほんじゃ、溜めてたゲームを一気に消化すんべ！」

「普通は出かけるとかじゃないかな……？」

そして合格発表日。

「というわけで文恵……代わりに見てきてね……」

「堂々と結果待っているんじゃなかったの？」

だってここで落ちてたら、俺のモブ人生がバッドエンドなんだもの……。

ネガティヴオーラー全開で立ちすくむ俺に、他の受験生がその不運な空気を移されないよう避けて通っていた。

「ほ～ら。怖い気持ちは、ここに来てる皆おんなじだよ？　私が付いてるんだから、ねっ？　勇気だして見に行こ？」

「……うん」

まるで母親が子供に言い聞かすように手を差し伸べてくれる文恵に、ついつい幼稚な返事してしまったが、いまはものすごく彼女に縋りたい気分だ。

ああ、やっぱ文恵は心のオワシスだ……。

いまここで「俺、高校受かったら文恵と結婚するんだ」と宣言したくなるぐらい頼もしくて、愛おしく思う。

……アレ？　死亡フラグ建てちゃった？

「はい着きましたよ」

わーいありがとう文恵ママぁ。すんげー見るの怖いわー……。

「もう、手で目隠さないの！」

「だってよ～……」

「そんな弱気なコウくん、きらいになっちゃうよ？」

「いやでござる！」

条件反射でつい目元に置いていた手を離してしまった。

もう後戻りはできない。目の前には無数の受験番号と受験者の名前が並んでいる。その羅列が視覚に広がり俺の脳に焼き付く。

「ええと……。あっ！　あった！　私の番号あったよコウくん！」

自分の番号がった文恵は俺の肩を掴みはしゃぐ。

対して俺は石像のごとく動かず、未だに魔王のごとく鎮座している紙面を凝視している。

「……あっ」

俺の口からぽつりと漏れた呟き。だがそれは感動の震えから来るものではなく、落胆と絶望によるものだった。

「えっ？　コ、コウくん？」

俺の態度から文恵はなにかを感じ取ったのか、笑顔から急転。心配した顔付きに変わる。

「……ごめん文恵」

そんな文恵に俺はただ一言、

「俺、落ちたよ……」

ただ結果的事実を伝えた。

「っ！　コ、コウくんっ！」

その場でしゃがみ顔を覆う俺に、文恵は悲痛な声を上げる。

ありがとな、文恵。こんな男のために悲しんでくれてよ。でもこれが俺の実力の結果だ。

やはり、身に余る願望だったのだ。主人公にもなれない凡人の俺が、けいおん世界で幸せになろうとするなんて。

届かなかった……。この通り俺は自分の力で舞台にも立てない。そんな無力な俺が、彼女達と同じ世界に仲間入りできるはずもなかった。

ああ、でも悔しいなぁ。行きたかったなぁ桜高。誰とも仲良しになれなくとも、けいおんの舞台に通えれば、それで十分だったかもしれないな。

「コウくん……」

でもよかったじゃないか俺。桜高には行けなくとも、俺にはこんなに可愛くて優しい幼馴染ができたんだぜ。今もこうして俺のために泣いてくれる天使のような子が。それで十分じゃないか。俺はもうとっくに幸せなのだ。

だから、祝福しよう。彼女が桜高に通えることを。けいおんの物語に出演できることを。

「おめでとう文恵。俺は別の高校になるけど、元気にやって行くん

だぞ？」

「そんなぁ。コウくんがいない高校生活なんてつまらないよぉ……」

文恵……。

「コウくんみたいなおもしろい変人さんなんて、そうそういないんだからぁ……」

……何気に失礼だね、この子。

「……ったく、泣くなよ文恵。一生会えないわけじゃないんだぜ。これからもちょくちょく家に遊びに行くし、そっちもこれまで通り俺ン家に来ていいんだぜ？」

「コウくん……」

そう。高校が別々になったぐらいで疎遠になるような関係なんてまっぴらだ。俺と文恵はこれまでもずっと仲良しだった。こんな程度で壊れるようなヤワな絆じゃない。

ただ残念だけだ。文恵と学生生活を共にできないことが。文恵がショックなのもそのことだろう。赤ん坊の頃から中学まで一緒だった奴が突然別の学校に……。

「ん？　あれれ？」

改めて合格発表に目を向けた俺は、自分の受験番号を取り出し見比べる。

「ん～～……。あっ！　ごめん文恵！　よく見たら俺の番号あった

わ！　緊張してて見落としてたみたい！　テヘッ！」

突然陽気な声色で合格宣言をすると、文恵は漫画のようにその場でズッコケた。スカートの中見えるぞ？

いやあ、一時はどうなることかと思ったけど俺も無事合格してました！　やったね俺！

これで楽しいモブ人生を歩めるぞ！　よっしゃがんばるぜ！

「コ……」

「えっ？　ど、どうしたの文恵？」

普段の穏やかならぬ文恵の雰囲気に合格の喜びは吹っ飛び、たじろぐ俺。

「コウくんの、バカァーーーーーーーーー！」

文恵が発したとは思えない怒号が、桜高に響くのであった。

「ふ、文恵ぇ。機嫌直しておくれぇ……」

「もう知らない！」

桜高からの帰り道、文恵は相変わらずご立腹で俺の先を歩いて行く。

（そりゃ不安にさせたのは悪かったと思ってるけど……）

商店街の道中、ぷりぷりと怒る女の子と情けない顔で機嫌を取ろう

とする男に、周りの皆さんは微笑ましいという具合に笑顔を向けてくれているが、俺の心境はそれどころではない。
文恵は怒らしたのはなにもこれが初めてじゃない。しかし今回に限っては、その怒りの度合いが半端じゃない。どうやら真剣に怒りを感じているようだった。
……これは、真面目に謝らなければならないようだ。

「……文恵。その、本当に悪かったよ。大事な結果発表でふざけたりして。いや狙ってあんなことしたわけじゃないけど……。少なくともあの場でするようなことじゃなかったよな。本当にスマン」

「……」

文恵は未だ背を向けているが、立ち止まって俺の言葉に耳を傾けてくれる。

「でも俺さ、嬉しいぜ。また文恵と同じ学校に行けることがさ。……だからさ、そのぉ、喧嘩じゃなくて一緒に喜び合いたいなぁ、なんて思うんだ。だから機嫌を……」

「心配したんだもん……」

ぽつりと文恵が呟く。若干震え気味でこちらに顔を向ける。文恵の目からはうっすらと涙の雫が浮き出ていた。

「私か、コウくんのどっちかが落ちていたらどうしようって……。離れ離れになったらどうしようって、不安だったんだもん……」

「文恵……」

「コウくんが落ちたって言った瞬間、ほんとショックだったんだから……」

文恵はここまで不安がっていたというのに、俺ってば相当無神経なことをしてしまったな、と申し訳なく感じた。

「いや、ほんとスマン……」

「反省してる？」

「してます。ケルマデック海溝ぐらい深く」

「……クスッ。なにそれ？」

「ん？　さては地理の勉強を怠ったな文恵？　いいか？　ケルマデック海溝ってのはニュージーランドの北にある深さ一万メートルを超える海溝で……」

いつのまにか、いつもどおりのテンションに戻り、俺と文恵は笑い合った。

なんだかんで俺達は、こうやっていつも簡単に仲直りできてしまう。

それもこれも、人を完全には憎めない文恵が元来持つ大らかさ故だろう。

（でも、これからは文恵の寛大さに甘えないように努力しなくちゃな。いつまでも情けない男じゃいられないし）

そんなことを心中で決意したのだった。

「おっ？」

帰りの途中、俺はある店のショーウインドウから見えた商品に目が止まった。

「どうしたのコウくん？」

「ん？　ああ、その……」

そこで俺はふとあることを閃いた。

（今日のお詫びも兼ねて……）

「文恵。先に帰っててくれるか？　ちょっと野暮用できたから寄り道してくるわ」

「えっ？　おじさまと明子さんが合格祝い用意して待ってるのに？」

「そんなに遅くはなんないって」

文恵を先に帰して、俺は店に入り、目的の商品を買うことにした。だが買う瞬間、一度思考して少し悩んだ。

ひょっとしたら、この行動が因果律を狂わさないか心配になったのである。だが、けいおん神による警告らしき気配は感じられなかった。

（大丈夫なのか？）

問題ないのならこのまま直行するのみだが、こんな些細な行動にさえ気を使わなければならない自分の運命を少し呪わしく思った。

（……けど、思いやりの心すら抑制しなきゃいけないだなんて、まっぴらだっつの！）

神にか、あるいは世界に対して不平をぶつけて俺は商品を購入し、帰路に就いた。

「わははは っ！　コウの字も文恵ちゃんも本当よくやった！　しかし文恵ちゃんはともかくコウの字まで合格するとはなぁ！　大丈夫なのかその学校の基準値は？　明日にでも潰れるんじゃないのか！？　がははははは っ！」

「不吉なことほざけているんじゃねえ！　厄病神かなにかかよ俺は！　つか普通に祝えんのかアンタは！？」

ただいま俺の家で文恵の両親も含めた合格祝いをしていた。親父と文恵の親父さんはすっかり酒が入っており、特にうちの親父のテンションが無駄に高かった。普段からやかましいのにそれがさらに拍車がかっているのだから腹立たしいことこの上ない。

ったく、子どもの合格祝いってこと忘れてねえか？

「あらあら二人ともすっかりできあがっちゃって……。ごめんなさいね文恵ちゃん。せっかくのお祝いなのにこんなに騒がしくて」

「あっ、いえ。このほうが私も楽しいですから」

母さんの気遣いに文恵は笑顔で返す。どうやら本当にこの状況が楽しいようだった。

（まあ、なにかイベントがあるたびにこんな調子だったもんな……。つか俺も含めて成長しねえな親父達は）

「ぬあぁぬぃを言うぅ！　家のコウの字は確かに変態でバカだが、儂に似て男気を宿している自慢の息子じゃわぁぁい！」

「ふっ。でも光輝さん。家の文恵だって、家内に似ておしとやかな女性に育ってくれましたよ。今時珍しい父親を大事に思ってくれるいい娘だと同僚からも羨ましがられていましてなぁ……」

さっきまで仲良く飲んでいた親父達は、いつのまにか自分の子どもの自慢話が始まったらしく、どっちが子どものことをわかっているかでレベルの低い口喧嘩をしていた。

これも恒例なことである。

付き合いきれんと思った俺は、ポケットに入れた物を握りしめ、親父たちに聞こえないよう文恵に声をかけた。

「文恵。ちょっと俺の部屋に来てくれないか？」

「えっ？　う、うん……」

なぜか頬を赤くした文恵を自室に誘う。

向かう途中、文恵のお母さんが文恵に「がんばりなさい文恵！　父さんは足止めしておくから！」「お、お母さん！？」という話声が聞こえてきたが、スルーしよう。

いやだって、やましいことするわけじゃないからね！？

「な、なに？　コウくん」

部屋に入り、両手を合わせて指をモジモジさせている文恵に、俺はポケットから綺麗に舗装された小さい紙袋を取り出し、彼女に差出す。

「これって？」

「今日のお詫びと、俺からの合格祝いだ。親父の前で渡すとからかわれるから、ここで開けてみてくれ」

文恵は受け取った袋から中身を取り出す。

「あっ、髪飾り……」

俺がプレゼントしたのは緑色のボールが着いた髪飾りだ。

「文恵っていつもその花柄の髪飾り付けてるだろ？　高校デビューのイメチェンでそういうのどうかなって思って買ったんだけど……。ああ、でも俺のセンスだし、気に入らなかったら……」

「う、ううん！　そんなことない！　すごく、すごく嬉しいよ……」

文恵は目を潤わして、大事そうに髪飾りを握りしめる。

「そ、そうか？　気に入ってくれたならよかったや」

「うん！　ありがとコウくん。……えへへ。大事にするね？」

文恵は手のひらの髪飾りを眺めながら満面の笑みを作る。

「大事にしてくれるのはありがたいけど、ちゃんと使ってくれよ？　でなきゃ髪飾りの意味ないじゃん」

「うん。でもなんか勿体ないから、付けるのは時々ね。せっかくのコウくんのプレゼント、大事にしたいもん」

「ん、そ、そうか」

そこまで言われるとなかなか照れくさいものを感じた。それを誤魔化すために、俺はなにか話題を振ろうとした。

「ええと。そ、そういえば文恵って昔からその花柄の髪飾り付けてるよな？　なにか思い入れとかあるのか？　そろそろ子どもっぽいと思うんだけど。ソレ」

「……コウくん、憶えてないの？」

「えっ？　なにを？」

文恵の髪飾りに関してなにかエピソードなどあっただろうか？　幼少時代は忘れ去りたい恥ずかしい思い出がわんさかとあるので、すでに忘却の彼方に追いやってしまったのかもしれない。

「……ううん。憶えてなくても別にいいの。些細なことだったし」

そう言って文恵は髪を結んでいる花柄の髪飾りを愛おしそうに撫でる。その仕草になにかときめくものを感じると同時に、昔のことを憶えていない自分を申し訳なく思った。

「……えへへ。でも高校生にもなって、この髪飾りじゃ、やっぱり子どもっぽいかな？」

苦笑いする文恵に俺はまた無神経なことを言ってしまったなと後悔する。

「あっいや。いいんじゃない？　女の子だったらまだ可愛いらしいものでも。無理に大人っぽくならなくても、大事なものだったら……。それに文恵には似合ってるしな、その花柄の髪飾り」

「似合う……。そっか。まだいいんだ。えへへ……」

照れくさそうに、しかし嬉しそうに頬をかく文恵。

「……あっ！　そういえば私、コウくんになにも用意してない！」

当然文恵はしまったという具合に声を上げる。

「ん？　ああ、別に気にするなよ。俺が勝手にしたことだし」

「ダメ！　私だけなにもあげないなんてヤダもん！」

真面目な文恵はギブアンドテイクに拘る様子なので、俺のほうが折れた。

「わかったわかった。じゃあ文恵はなにくれるんだ？」

「ええと……」

しばらく熟考した文恵はなにを考えたのか、顔を真っ赤にし、

「……じゃあ、ちょっと目を瞑って、手を出して？」

と遠慮がちに言ってきた。

「ん？　おう。」

疑問符を浮かべながら言われたとおりにする。文恵のことだから心臓に悪いサプライズはしないと思いたいが……。

「ねえコウくん……。見た目はまだ子どもっぽくても、中身はいつまでも子どもじゃないんだよ？」

文恵の囁くような、彼女らしからぬ少し艶っぽい声が聞こえたかと思うと、彼女の息遣いが近くなっていき……

「コウの字ぃぃ！！　パパはお前のことをよくわかっていることをこの頑固者に言っておくれぇぇいいい！！」

「頑固者はあなたのほうでしょ！　光輝すわぁぁぁぁぁん！！」

突然部屋に乱入してきた酔っ払い親父ーズ。

「光輝さん。あれほど行ってはダメと言ったのに……」

「あなたも酔っぱらっているからといってはしゃぎすぎよ……」

そして笑顔だが鬼神のオーラを纏う主婦様がた。ちょ、マジこえぇです……。

「「お仕置きが必要ね？」」

「えっ？　ちょっと明子さんやい？」

「お、落ち着いてくれ……」

ただならぬ気配を感じて酔いが冷めたのか、親父どもは恐怖に震えだす。

「ふ、文恵ちゃぁぁぁん！！」

「お、お父さんを助けておくれえええぇ！！」

親父どもは情けないことに文恵に助けを請うが、なにか文恵にもただならぬ気配を感じるんですけど！

「明子さん、お母さん……」

「ふ、文恵さん？」

文恵は底冷えするような低い声を出し、

「遠慮なくやっちゃってください……」

文恵の了解を得たことで主婦の二人は「ＯＫ、まかせろ」という具合にサムズアップし、それぞれ自分の旦那を引きずって行った。

「「ぎゃあああああああああああっ！！」」

断末魔らしきものが聞こえてくるが、俺はなにも聞いていない……。
いやほんとに。

「……」

「あ、あのお。文恵さん？　大丈夫ですか？」

ただならぬ気配を漂わせる幼馴染に対してつい敬語になってしまう。

「うん。大丈夫だよ。コウくん。うん、大丈夫……」

と言って極上の笑顔を向けるが、俺にはそれが逆に恐ろしくてしかたがなかった。

今日の文恵……いや女性陣を見て得た教訓。

？女性は絶対に怒らせるな……？ということだ。

（そういえば、文恵のプレゼントって結局なんだったんだ？）

またもや遠くの彼方から、『どうしてそこだけは主人公スキル発揮するんだ？』というような、けいおん神の呆れた呟きが聞こえてきた気がした……。

第三話「受験！」（後書き）

というわけでコウくん、なんとか桜高に受かりました。
これからいったい何人の子が彼の毒牙にかかることやら（笑）。
リアルでも受験が本格化ですね。受験生の方々はどうか頑張ってください。この小説が少しでも皆さまの気分転換になりますよう。
ご意見、ご感想お待ちしております。

間章「光真&文恵の呟き」

Ｓｉｄｅ　小野　光真

ひと悶着あったが、合格祝いは無事に済んだ。
無事にと言ったら無事になのである。
現在時刻は深夜の一時だが、俺は未だ起きて、溜めていたＴＶゲームを消化していた。
しかし、やっていてもなんだか楽しくない。ゲームがつまらないからではなく、これからのことをいろいろ考えているせいだ。
いよいよ、けいおんの本編が始まろうとしている。軽音部の少女達はこれから出会い、絆を深め、様々な物語を紡ぎ出す。でもそこに俺が関与することは……、いや、することができない。彼女達の物語をモブである俺が崩すことは許されないから。
そんなことはとっくに承知していたが、今一度自覚すると、やはりやるせないものを感じる。
自分もその輪に入りたいと、そう思ってしまう。
誰かと恋人になりたいとか、そういうやましい気持ちで思っているわけではない。転生する以前はそう騒いでいたが、そんなものは二の次の理由だった。

本当に俺が欲しいのは、「絆」だった。
軽音部の少女達のような、「仲間」だった。

たった約三年で、軽音部達は強い絆を得て、皆で笑い合う。ときどき衝突もするが、それがきっかけでさらに強固な絆となる。
唯一の後輩、中野梓が入部してからは誰も入部しなかったように、あの五人組は完成されている。誰も入り込めない、彼女達だけの世界と物語を形成している。そこに異分子である俺が入り込める余地

はない。彼女達の輪に入れるのは、同じ運命を背負った者と、神に選ばれた転生者だけなのだ。
俺が彼女達の物語に関わることは一切ない。それが俺に課せられたルールだから。

「ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ！」

考え事をしている間にゲームオーバーになっていた。無機質な電子音が「コンテニュー？」と聞いてくる。
やる気が起きないので、俺はそのままゲームの電源を切った。真っ暗になったテレビ画面に俺の顔が映っている。その顔を見て、俺は自嘲したくなった。

（お前。ほんとに主人公らしい面してないな）

自分の顔に向かって言う。
この身は所詮モブ。俺がいてもいなくてもけいおん世界は勝手に進んでいき、人々を感動させ、笑顔にする物語が生まれる。俺はただ背景に徹するだけだ。
……それでも、それでも俺は欲しいと思う。彼女達のような物語を。彼女達のような仲間達を。
だから決めた。モブならモブらしく、モブ達と絆を深めようと。自分達だけの物語を紡ごうと。

……でもなぜだろう？　俺がそこまで人との絆に拘るのは。自分のことなのにわからない。
死んだときのショックが原因なのか、俺の前世の記憶は曖昧なのだ。断片でしか思い出せず、自分がいったいどういう生活をしていたのか、はっきりしない。
……ただ、あまりいい思い出ではなかった気がする。だからこそ未

練を残して転生しているわけなのだから。なら、無理に思い出さないほうがいいのだろうか。

「……お前、いったい前世でなにしてたんだよ？　そこまで人恋しくなるようなこと経験したのか？」

鏡の向こうの俺は答えない。当たり前だろ、とそう思った瞬間だった。

視界に、光が閃き、俺の意識は飛んだ。

「！」

そこはどこなのか、周りにいる者たちは誰なのか、わからない。どういう状況なのかわからない。

ただ、そのときの心情が怒涛のごとく俺に流れ込んでくる。俺の知らない状況にも関わらず……

ただひたすら苦しかった。痛かった。辛かった。悔しかった。恥ずかしかった。悲しかった。泣きたかった。叫びたかった。逃げたかった。

いやで、いやでたまらない。助けてほしくてたまらないのに、なのに……

いやだ。助けて。助けて。助けて

助けて。助けて。助けて。

自分の行いを思い出して、恥ずかしさのあまり枕を腕で締め付け寝転がった。自分でも驚くほどに大胆なことしてしまったと思う。だって嬉しかったのだ。一緒の高校に通えることが。彼からプレゼントを貰えたことが。喜びの連続で理性が麻痺してしまったのだ。その結果、あの行為に走ったということは……

（やっぱり、そういうことだよね）

私の中でコウくんがどんどん大きな存在になって行く。兄妹同然に育った家族のような男の子を、それ以上の存在として見始めている。活発で、ときどきちょっとえっちで、たまに変なところで気を使い、そしていつもおちゃらけているコウくん。一方で些細なことで慌てたり泣いて、慰めるとすぐケロっとしちゃう、そんな男の子。小さい頃からずっと一緒だった彼のことを、自分のことよりも知っている気がする。やっぱり、いつも目で追っていたからだろう。いつからそんな気持ちを抱いたのかはわからない。こういうのは理屈じゃないのだと思う。

でも、あえて理由付けをするなら、彼の弱さを知ってしまったからだろう。普段の彼からじゃ気付けない。傍にいなければわからない側面。

小野光真という少年は、きっと誰よりも傷付きやすい。

たとえば、仲のいい友達と話しているとき。楽しそうに笑い合っている中で、コウくんはいつも相手の顔色を窺っている。怒らせないように、不快な思いをさせないように、いつも慎重になって相手のことを考えている。嫌われることが怖いというように。

それは私でも同じだった。私が怒っているとき、コウくんはこの世の終わりのような顔をして、私の機嫌を直そうとする。私はらしくない彼の姿を悲しく思い、いつもどおりのコウくんに戻ってほしくて、怒りなんて簡単に捨ててしまう。私が許すと、彼は心の底から安心したような顔になるのだ。

コウくんは人との繋がりを求めている。そしてそれが壊れることを恐ろしく思っている。異常なまでに。

私が知る中で、コウくんがそうなってしまった経緯やトラウマはないと思う。いじめなんてなかったし、むしろわけ隔てなく好かれるほうだった。……それとも、私が知らないだけで、昔なにかあったのだろうか。

……コウくんは、時々ここことは違う場所を思っているようなときがある。変なことを言っているかもしれないが、そう形容するしかないような様子なのだ。その姿を見ると、私はひどく不安になる。彼がすごい遠いところに、

――別の世界に行ってしまうような気がするのだ。

気が付いたら、もう手の届かないところに行ってしまいそうで……。だからときどき彼のことがすごく怖くなる。得体の知れないなにかを抱えて、苦しんでいそうで。それを誤魔化すために、普段は明るく振舞っているのではないのだろうか。

そんな彼を見ていて、私は思ったのだ。

？この人を幸せにしてあげたい？と。

彼の心の闇を理解することはできないかもしれない。でも、できることならなんでもしてあげたい。彼が幸福だと思えるようなことを、したいと思うことを、ぜんぶ叶えてあげたいと思った。

（ああ、そうか）

改めて考えて気付いた。自分はこんなにも小野光真という少年を思っている。もうどうしようもないほどに。

あの行為も彼を幸せにしてあげたい一方で、独占したい気持ちがあったのかもしれない。

再び頬が熱くなる。彼のことを思うだけで、こんなにも胸が高鳴る。

自分が自分でいられなくなる。

「……コウくん」

これから自分達はどうなるのだろう。ただの幼馴染ではもういられない気がした。……いや、いたくなかった。もっと、もっと深いところで思い合っていたい。一緒に幸せになりたい。

だから頑張ろう。コウくんが少しでもコウくん自身のことを好きになって、本当の笑顔でいられるように。

そう決心して、私は目を閉じた。夢の中でも愛しい彼に会えるようにと願いながら。

物語は動き出す。日の光の物語と、その影で同時に進行する一人の少年と少女達の物語が。

第四話「入学！」（前書き）

皆さん、あけましておめでとうございます。
今年はおだやかな年になることを願っていざ投稿！

第四話「入学！」

春。
それはなにかが始まる季節。すべての者達に敷かれる新しいレール。
新しい可能性……。
明確か漠然であろうと、人々はこの季節に希望を抱くものだ。
そう、いままでとは違う、新しい人生を築きたい、新しい自分になりたいと――

……な～んてキザっぽいこと言ってるが、要は入学式である。
いよいよ俺のモブとしての人生が幕を開けようとしていた。転生して早十五年……すべてはこの日のため……。
ついに、ついに始まるぜ！　待ちかねていたよ桜高スクールライフ！　思う存分満喫して、見事なけいおんリア充となってやる！
……っと活気付いていたのに、さっそく問題が一つ。

……なんで文恵が別のクラスなんどぅあああああぁぁぁぁぁっ!?

幼馴染の女の子と同じ教室なんて正にリア充主人公の在り様だというのに、さっそく出鼻を挫かれた気分だ……。これも俺に主人公の素質がないからだというのか？

けど冷静に考えると、文恵のクラスには唯と和がいたはずだ。突然彼女達と同じクラスになると行動範囲がいろいろ制限されそうだし、まだ慣れないうちにシナリオ本編の近場にいるのは、いろいろ危ういだろう。

とりあえずそうプラスに考えた。

けれど文恵はあまりポジティヴに受け止められなかったらしく、教室移動する際、いつまでも俺が別クラスになるのを心配しているようだった。

というより今朝から文恵の様子がおかしい。いや、態度自体はいつもどおりなのだけど、過剰というか、えらく密着してくるというか……。

現にいまでも俺の手を握って「大丈夫だからね？」と輝くような笑顔を向けてくれる。

な、なんか今日はずいぶん優しいですね、文恵さん？

合格祝いの日以来、幼馴染の挙動になかなか理解が及ばず困惑しているわたくしです。そんなに心配させるようなことしたかな俺？

その後も文恵は「女の子がいっぱいでも舞い上がらないでね？」とか「男の子がいたらなるべく仲良くするんだよ？」とか「式の前にちゃんとお手洗い行ってね？　お手々ちゃんと洗うんだよ？」などと小言をおっしゃる。

お前は俺の母さんかっての!?　てか言われなくてもちゃんと手ぐらい洗うわ！

なんで俺の幼馴染は急にこんな過保護になってしまったのだろう？

高校デビューを機にお姉さんキャラでも目指すのだろうか？

とまあ、離れることを渋る文恵をなんとか嗜めて俺は教室に向かったのだが――

「知らない天井だ」

ってこのネタもう使い古されてるよな……。というか保健室か？

ここ？

なぜか俺はいつのまにか消毒くさい保健室のベッドで横になっていたのだ。

はて、なにがあってこんなところに？

……はっ！　思い出した！

確か教室に入った途端、俺の目に神々しいお姿が目に止まったのだ！

……そう、なんと同じクラスに琴吹紬がいたのである！

生で見るムギの美しい姿に思わず「むぎゅううう！」と叫び、感動のあまり鼻血を噴出し、失神してしまったのだった！

んん？　馬鹿らしいだと！？　アンタなムギは天使で女神だぜ？

あんなに気を遣えて器量良しなお嬢さまなんてそうそういねえぞ？

そんでもってちょっと天然で庶民の皆と一緒のことしたがる可愛らしいところもあるんだぜ？　最高じゃん！　本人を間近で見て興奮しない紳士がいようか？　いや！　いない！ビバむぎゅうううぅ！　中の人も美人です！

……取り乱しすぎたな。

いやぁ憧れのキャラクターを前にして眠らせていた情熱が湧き上がってしまったが、冷静になりなさい俺。悔しいが彼女と深く関わり

合うことはない。所詮俺はモブ。よくて、いいクラスメイト止まりだ。分を弁えよう。よし、もうメインに浮気（？）しないぞ。

さて、と俺はベッドから起き上がり時計を確認する。

（うわ、入学式もう終わってるじゃん……）

どんだけ気絶してんだよ俺。これじゃクラスでの自己紹介もできないんじゃないか？　顔覚えてもらえないじゃん……。

いきなり影薄い人になるのはいやだなぁ、と頭抱えていると、

「し、失礼しま～す……」

と女の子の遠慮がちな声が保健室に入ってきた。

現在保健の先生は？な・ぜ・か？いない様子だったので答える声はない。だから必然的に俺が返事をしてあげた。

「ほ～い。保健の先生ならいまいないよ～」

「あっ、起きてたんだ。お、小野くん……」

んっ？　俺に用事か？　けど聞き覚えのない声だが誰だろう？

……いや、待て！　あるぞこの声に聞き覚え！　ええと、この声の持ち主は確か……

記憶を思い起こそうとしている間に、声の持ち主は俺のベッドの傍に到着した。

――まず、その子を一目見たら皆？小さい？と等しく思うことだろう。そして長い前髪で右目が少し隠れがちな鬼〇郎を連想させるおかっぱ頭。

ここまで言えばわかるであろう。

アイドルモブ娘の一人にして、中でも知名度の高い子の一人、木下しずかである。

（し、しずかだと!?　まさか入学早々三年二組（予定）のモブ娘と出会えるとは!）

あれ、でもなんで俺の名前知ってるんだ?　面識はまだないはずだが。

「えーと君は……」

「あっ!　ご、ごめんね。わ、私同じクラスの木下しずかっていうの。さっき、委員会決めで保健委員になったから、小野くんの様子を見に来たの……」

ああ、納得。てかしずかクラスメイトだったのかよ!　ちゃんとクラス表確認しとけよ俺!　モブ王として失態だぞ（謎）。

しかし間近で見るとしずかって本当ちっちゃくて可愛いな。おどおどして一生懸命話そうとする仕草も愛らしい。

「ええと、ぐ、具合はどう?　急に鼻血出して倒れちゃったけど、なにか持病とか……」

「あ、いや。そういうのはないけど……」

?ムギ萌え?という不治の病にはかかっていますが。

……てかこの子がさっきからおどおどしているのって、奇行に走った男に警戒しているからじゃないよな?　う、うん、違うよね?　しずかって人見知りするらしいし。……そう思いたい。

よ、よしここは比較的まともな男子として振舞うよう心がけよう。

「そのぉ、わざわざありがと。……木下、さんでいいか？　悪かったな。初日から保健委員の仕事持ち込んじゃって」

「え？　う、ううん。別に気にしてないよ？」

ううむ。どうも反応が固い。やっぱり初対面の人間と話すことに慣れてないみたいだな。

しかし男子が具合悪いときは男子の保健委員が担当するはずだが、なぜ女子のしずかが？

そのことを聞いてみると、

「あっ、そのこともついでに話しに来たんだけど……」

と答えた。

曰く、俺のクラスは俺を含めて男子が十人しかいないらしい。けれど他クラスに比べれば多い方で、委員会を決める際、なるべく男女混合にしたいという教師の要望で、男子全員が委員会に所属することになったようだ。

最後に保健委員だけが残り、その枠を埋めたのが……

「俺ってわけか」

保健委員の相方が倒れたならば、そりゃ、もう一人の保健委員であるしずかが必然的に様子を窺いに来るしかない。

しかし人がいないところで勝手に委員会を決めるとは……。第一なんで今日失神で倒れた男をわざわざ保健委員にするんだろうか？

謎である。

「え、えと。ご、ごめんね。勝手に委員会決めちゃって。私が謝る

のも変だけど……」

しずかは俺の気持ちを代弁してくれた。彼女の言うとおり、しずかが謝る必要はない。にも関わらずちゃんと口にして気を遣ってくれるとは。

（めっちゃええ子やなぁ……）

こんな健気な子を前にして「本当だよ！　舐めんとかゴラァ！」なんてブチギレるような奴は真の男ではない。

「いや気にすんなよ木下さん。もともとなにかの委員会には所属するつもりだったし」

「そ、そう？　ならいいけど」

とりあえず体調はもういいのでしずかと教室に戻ることにした。戻る途中、隣で廊下を歩いているしずかを見てみる。

いや、ほんとちっこいな。頭が俺の胸のところに届くか届かないくらいだ。肌だって赤ちゃんみたいに真っ白でつやつやである。

（いけないことだけど、つい抱きしめたくなる愛らしさだなぁ……）

「……どうかしたの？　小野くん」

視線に気付いたしずかは俺に問う。

「あっ、その……」

ムギのように「抱きしめてもよかですか！？」と聞くわけにもいか

ないし、そんなことしたら途端に変態のレッテルが貼られて俺の人生終了だ。
とりあえずここは、誰もが質問するであろう事柄で話題を広げてみよう……

「あのさ……。木下さんって一応俺と同い年だよね？」

瞬間、空気が凍った。

ってしまった！　「小さくて可愛いね」って類のこと言うつもりがまるで小馬鹿にするようなニュアンスになってしまった！

「……たし……だもん」

「えっ？」

俺の言葉を聞いた瞬間、しずかは顔を俯かせ、まるで奈落の底から這い上がるような囁きをしたかと思うと、

「私、高校生だもーーーーーーーーーーんっ！！」

と大絶叫。

……えっ？

「なんなの！　なんなの！？　今日は皆して『年いくつ？』とか！『飛び級？』とかいちいち聞いてきてぇ！　同級生に決まってるでしょぉ！　生徒手帳にちゃんと生年月日書いてあるんだから！ほら見て！　同じ年に生まれてるでしょ！？　ちっちゃくても私だって立派な高校生なんだからーーーーっ！！」

察するに身長類の質問は本日、耳にたこができるくらいされたらしく、いい加減不満が爆発したのか、マシンガンのように不平をぶちまけては、両腕をパタパタさせて「もうーーっ！」という具合に地団太を踏んでいる。

……彼女の最後の平常心を打ち砕いた張本人である俺は、しずかのその有様を見て不謹慎にもこう思ってしまうのだった。

（なにこれ可愛い……）

本人は本気で怒っているのだろうが、悲しいかな。傍から見たらそれすら愛らしく映ってしまうのだ。

喜怒哀楽、すべてが可愛く見えてしまう天然小動物少女。それが木下しずか！

「……ぬっ、ぬっ！」

そんな少女を前に俺の理性は……。

プツン、と音を立てて切れました♪

「ええい！　もう辛抱ならんわ！」

「ふえええっ!?」

世間体？　社会性？　クソ喰らえ。

そんなことより俺はいまこの小動物を愛でたいんじゃ！　そっちのほうが重要じゃ！

俺はしずかの両脇を掴み、「ほぉら高〜い高〜い♪」するように持ち上げる。しずかの体は羽のように軽く簡単に持ち上がってしまう。

「ほえええっ!?　ちょ、ちょっとなにするの小野くん!?　お、降ろしてよぉ!?」

「木下しずかくん!」

「はっ、はい!?」

「君は自分の魅力がわかっていない!」

「えええええっ!?」

俺の主張に戸惑っている様子のしずかに、俺は口を休めず諭す。

「小さいがなんだ!?　いいじゃんちみっこスタイル!　おかげでなにをしてもスゲエ可愛く見えるんだからそういうのに憧れている女の子にとって羨望の対象だよあーた?　もっと胸を張りなさいよ!」

そして近くで胸元見ると意外と膨らみあるねあーた!　そのギャップがさらにタマランよ!　もちろんこっちは口に出してないよ?

「か、可愛い?　あ、あう……。で、でもやっぱり小さいといろいろ不便だし……、高い所にあるもの取れないし……、よく他の人に頼んで迷惑かけるし……、小学生料金でまだ乗れるし……」

最後のちゃっかり得してんじゃん!?

……じゃなくて。

俺は顔を赤くして悲観になっているしずかにこう言い放つ。

「だったら――――俺が君専用の梯子になってやんよ！」

「……は、梯子？」

そう梯子。

まあどう意味かというと……。

「ええとな。真面目な話するとさ、持って生まれた特徴にコンプレックス感じるのはわかるんだけど、いちいち悲観的になってたら辛いだけじゃん？　だからある程度割り切りってのが必要だと思うんだよね」

「……」

しずかは黙って俺の言葉に耳を傾ける。

「周りがそのことにツッコンできてもさ、これが自分の持ち味なんだぁ、って思えば少し気楽になれんじゃないなかな？　逆にその持ち味を活かしてプラスにしていくとかさ」

俺だって抜けてるとことか、打たれ弱い部分をおもしろおかしく外に出すことで悲惨な状況を免れている。

……でも、それでもときどきそんな自分がしょうもないって思うときもある。だからそういうときは……

「それでも、辛いって思ったときや、困ったときは、誰かを頼りなよ。別に迷惑かけたっていいんだ。足りないところ、できないことを誰かで補う。それが普通なんだから。幸い、いまは同じ委員会になった俺がいるし、まずは俺に頼ってみてくれよ。君がコンプレックスに感じていることを全面的に押し付けちゃってくれ。必要なと

きはいつだって梯子としてお助けするぜ？」

だってそうだろ？　生まれ持ってしまったものはしょうがないじゃん。それをいいか悪いかって決めるのは本人次第なんだし。ならいいって思ったほうが人生楽しいに決まってる。

問題なのは他人がどう見るかってだけ。でもまだ彼女のコンプレックスはマシなほうだ。だってなにしても可愛いんだから。

前世の俺なんて……。

……なにかを思い出しかけたが、不吉なものを感じ、すぐに頭を振って忘れ去る。

そして改めてしずかと向き合うと。

「……ぷっ、くすくす」

しずかは俺の話を聞いて、おかしそうに笑っていた。

「つまり、私のお助けをするから、梯子ってこと？」

「そっ。取れないものがあって困ったときは遠慮なく俺をお呼びなさい？　抱っこや肩車でもなんでもして助けちゃる」

彼女は「それはちょっと恥ずかしいけど……」と苦笑いするが、嫌ではいないようだった。現にいま俺に抱えられていても、もう抵抗していない。

「小野くんって、変な人だね。今日が初対面なのに、私のこと励ましてくれたりして……。なんだか前から私のこと知ってるみたい」

しずかは緊張が解けたのか、砕けた口調と笑顔を向けてくる。

「そこはいい人って言わない？」

「ううん。変な人なの。だって私の悩んでいたことが急に面白おかしいことに思えてきたんだもん。小野くんの話聞いてたらなんだか馬鹿らしく思えてきちゃった」

……褒めてんのか、けなしてんのかどっちだ？　この子は。

「……でも、嬉しかったよ」

と最後に彼女は付け足す。

「なんかすっきりしたよ。ありがとね小野くん。それと、これから一緒によろしくね。お言葉に甘えて頼らせてもらうから♪」

そしてぱあっと太陽のような笑顔を向けてくれた。

その姿を前に俺は……

「くあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！　やっぱ可愛いでこの子！！　おおぉ可愛い可愛い！　しずかわいいいいいい！！」

愛らしいしずかという名の小動物を抱きしめ、ぐるんぐるんと回転した。

「ひにゃあああああっ！　ちょっ！　こういうのはやめてーーーっ！！　目がまわりゅうううぅ！！」

という具合に俺としずかは仲良く（？）なりましたとさ。
……いや、ほんとだよ！　最初の堅い態度は削り取れたし、メルアドだって交換したんだから！
まあ、委員会の仕事で連絡が必要になるからって理由からだけどね。けどしずか本人は「普通にメールとか電話してきてもいいからね♪」と言ってくれたので、彼女とのコミュニケーションを深められそうだ。
……ちなみに教室に戻ると、俺はクラスの皆から「鼻血の人」という不名誉なあだ名が付けられた。なんかスケベそうな名前じゃねえか……。あと「『むぎゅうううう！』ってなに？」とも聞かれたが、そこは忘れていただきたい……。語源となった本人もいるしね。

そんでもって放課後である。てかほとんど気絶してたから時間が過ぎた感覚がしない。
教室を出ると俺の携帯電話にメールの着信音が鳴る。

「……んっ？　文恵からか」

メールには「一緒に帰ろう」という旨が書かれていたが、今日は買い物の予定があったので断った。
そのぉ、地元で買うには少し恥ずかしいオタッキーな漫画を買うので、内緒でわざわざ都心のほうまで出向くのである。
しかし文恵の返信には

？一人で大丈夫！？　一緒に行くよ！？？

とまたもや過保護スキルを発動してくる。
超プライベートだからヤメテ……と懇願すると理解はしてくれたが、

?迷子にならないように気をつけてね??
とラストに心配のひと押し。
だからお前は俺の母さんかっての!?

文恵の謎の挙動に頭を捻らせながら校門を目指していると、外に設けられたベンチで一際目立つ人物が視界に映った。

（ん？　……お、おいおい。もしかしてあれって……）

その美貌は道行く男子だけではなく、女子にさえ注目の視線が向けられるほど。縦ロールと無表情な顔が印象的な、しかしそれが見事に似合っている深窓の令嬢のような美少女。

若王子いちごである。

おそらく三年二組でトップクラスの知名度と人気を誇るであろう、モブ娘を代表する少女だ。
彼女はベンチに座り携帯電話をいじっている。別に特別なことをしているわけではない。
……しかし、どこにでもある日常風景のはずなのに、どうして彼女がそうしていると絵になるのだろう。
その神々しいとまで言っても過言ではない美貌を前に俺は見惚れてしまっていた。
信じられない。こんな美少女がメインではなくモブだなんて。最早そんな身分に収まるようなオーラじゃなかった。
いつまでも、見つめていたくなる彼女の姿を凝視していると、

「……私になにか用？」

透き通っていて、抑揚のない美声が俺にかけられた。

って、え？

「あっ……」

やけにいちごの姿が近くになってきているなぁ、と思っていたら、なんのことはない。俺が無意識に彼女に近付いていたらしい。隣に座ろうとするぐらいに接近している。これは不審になって声をかけられるに決まっていた。

「あっ、あのですね……」

まずい。なんて言えばいいんだ？　だってなんの接点もないのに急にフレンドリーな態度を取っても不思議に思われるだけだし……。俺はあたふたして目を泳がせていると、いちごが持っている携帯電話に目が止まった。

（はっ、そうだ！）

この窮地を脱するため、俺はとっさに閃いた手段を実行する。俺は自分の携帯電話を取り出し、彼女の前に差し出して叫ぶ。

「あの！　俺とメル友になってくれませんか！？」

「……え？　やだ」

案の定、断られた。しかも彼女の名言で。
わあい。いちごの名言で切り捨てられたよぉ？　嬉しいなぁ……わけねえだろ！　恥ずかしいし悲しいよ！　なに新入した大学生みたいなノリでメルアド聞いてんだよ俺！？

いちごもなにか警戒するような冷めた視線で俺を見てくる。
な、なんだ？　この女王に見定められるような気分は……。

「……なんで知らない人にいきなり個人情報と連絡先を教えないといけないの？」

……ごもっともである。

「あなた、ナンパのつもり？　けど最近のナンパだって少しは節度守るわよ？　もうちょっとうまい方法があるんじゃない？　いまのだと直球過ぎて引かれても文句言えないわよ？」

……正論過ぎて返す言葉もない。

「正直なのはいいかもしれないけど、時と場合を選びなさい。じゃないとただの変態だし」

彼女はズバズバと毒舌を放ち俺の心を抉ってくる。
ていうか滅茶苦茶喋るじゃないかこの子！　どこが無口でクールやねん！　むしろドSだよこれじゃ！
いや、言ってることは全然間違っていないが……

だがしかし！　俺の名誉のために一応反論はさせていただくぞ！

「ま、待ってくれ！　俺は別にナンパのつもりで聞いたんじゃない

！　純粋にメル友が欲しいと思ったからだ！　ほら、ここ共学になったばかりで女子ばっかだろ？　だから男子って理由で孤立しないように女子との交友関係を増やそうと思って……」

ちなみにこれは嘘じゃない。友達を増やし、学生生活を充実させるために俺はここに来たのだから、主張自体はズレていない。まぎれもない本心である。
だから決してナンパではないのだ！

「……なるほどね。理由はわかったけど」

おう！　わかってくれたか！

「なら、なおのこと私の連絡先を聞く必要はないんじゃない？　別にクラスの子でも事足りるんだし」

さらに反論の余地がない正論を言い返される。
だ、だめだ。話し合いで彼女に勝てる気がしない。
俺が頭の中で言葉を探っているうちに、いちごはベンチから立ち上がり、俺に背を向けてしまった。
うわぁぁぁっ！　俺の第一印象最悪だぁぁ！！　ていうかこの先のいちごのコミュニケーション消滅したも同然じゃないか！

俺は膝をつき、いちごとのコミュニティを失くした愚かな自分の失態を嘆いた。
しかし、そんな俺にいちごは背を向けながら言葉を投げてきた。

「いまは無理でも、この先なんらかの関わりを持つようなことがあれば、連絡先教えるの考えてもいいわよ？　関わるようなことがあれば、だけどね」

「えっ？」

同情か憐れみか、またや合理的な判断か、彼女は補足するようにそう言い放った。

えと、要約するとまずは知り合ってからってこと？

……なんだ。きつい態度と物言いするけど意外と懐広いじゃないか。

彼女は俺をただ切り捨てるだけではなく、どうすればいいのか、ちゃんと道を示してくれた。

実は正義心が強かったりする彼女だからこそ、中途半端な拒絶はせず、自分の発言に責任を持って、妥当な意見を相手に提示してくれる。

それを呼吸するかのようにこなす、若王子いちご。

（なんつうか、本当にいい女だな……）

こりゃ人気が出るのも頷ける。ルックスも中身も彼女は完成され過ぎている。

少し、憧れるかもな。そういうの……。

いちごの凛々しく綺麗な後ろ姿を見て、そう思うのだった。

「じゃ、引き続き友達探し頑張りなさい。ナンパさん」

「だからナンパじゃないっつうの！」

そして落とすところは落とす……。

「はあ、なんか数年分の労力を使い果たした気分だ……」

あの若王子いちごと対話するのは並大抵の力では厳しい。あれはラスボスの風格だ。果たしてこの先、彼女と仲良くなることはできるのだろうか？

（とりあえず気持ち入れ替えて、目的の物買いに行きますか……）

都心にあるアニメグッズが豊富な店に向かうため、俺は電車に乗って揺られ揺られる。そしてなんとか目的のコミックは購入できた。

（ああいう同好の人達が集まるような場所だと気兼ねなく買えるよな）

帰りの電車で戦利品を買えたことに満足しながら、俺は今日のことを思い返していた。

（しかし、今日だけで二人もの三年二組のモブ娘に出会えるとは）

仲良くなっていない者が一名いるが、出会いがあること自体奇跡的なことだ。なかなか幸先がいいと感じる。これは三年生になる前にほとんどのモブ娘に出会えるかもしれない。

（いやそれは期待しすぎか。それこそどんな主人公だよって話だし……）

しかし、俺の予想は裏切られることがお約束なのか、さらなる出会いが本日ラストに残っていたらしい。

（えっ？　あれって……）

同じ車両の向こう側に立っている人物に俺は目を見張った。

黒髪のおさげ。細くて女性らしいラインを描いた長身。そして泣きぼくろが特徴的な女の子。三年二組モブの一人、遠藤未知子がそこにいた。ちなみにエンドウという名前からあだ名は「マメ（公式）」である。

（マ、マジかよ！　まさかマメちゃんとも出会えるなんて！）

アニメでは残念ながらセリフも出番も恵まれなかったが、その女の子らしい整った容姿からファンも多かったモブ娘である。実は前世では一番気になっていた子だ。そんな彼女を間近で見られることに感動を覚えたが、少し様子がおかしいことに気付く。頬を赤くし、必死に苦痛に耐えているような……。

そして気付く。彼女の背中に異常に密着して、不審な動きをしているサラリーマン風の男がいることを。

（痴漢だ……）

通勤ラッシュほどではないにせよ現在の車両は少し混雑している。しかしあれほど密着が必要なほど混雑しているわけじゃない。人一人分のスペースは十分にあるはずだ。事故ではなく、意図的に痴漢していることは明らかだった。

（つうか、こんな遠目でも気付けるのになんで近くにいる奴は気付かない！？）

すぐにわかった。皆見て見ぬふりをしている。

止めようかと迷っているような素振りを見せる者もいるが、けっきょく関わるのがいやなのか、誤魔化すように携帯電話をいじり始め

る。

（なに考えてんだよ！　悪いのはあっちなんだから堂々と「痴漢です！」って言えばいいだけだろ！　……なんで、なんでどいつもこいつも、こういうときばっかり無関心を装うんだ！）

理不尽な出来事に腹立っていると、また以前のように俺の脳内でビジョンが浮かび上がる。

ガクランを着た、いかにもガラの悪い連中が数人で一人の男子を蹴り上げている。それを見て見ぬふりをして去る周りの人間達。

こっちに来てからの記憶じゃない。これは俺の……。

幻影が消える。そして覚悟する。

人間、巻き込まれたくないから我関せずの姿勢を貫く。きっと誰かがなんとかしてくれる、助けてくれるって勝手に思い込んで。

でも、そんな考えを持つ奴しか周りにいなかったら、けっきょく誰も助けてはくれない。

前世だったら、俺もそんな人間の中に含まれていたのかもしれない。

けれどいまは……。

俺は人垣をかきわけるようにして前進する。脳にはすでに怒りの撃鉄が引かれている。

（俺はそういう人生がもういやだから、この世界に来たんだ）

放つべき怒声という名の弾丸は、喉元に収められる。

（俺は変わる。変わらなきゃだめなんだよ！　なにより……）

右手は目標の腕を掴み、

（俺がファンとして慕う女の子を傷つけることは許さない！　例え、まだ関わっていなくても……、その子が泣いているのなら手を差し伸べる！　助ける！）

煮え滾る怒涛の弾丸が、口から放たれる。

「こ、こここにょ、こにょ、こにょ、ち、ち、痴漢野郎ぅ！　しょ、しょ、しょの子からて、て、て、手を離せぃ！　こ、この変態ぃぃぃ！」

放たれた弾丸は勢いよく発射されたかと思いきや、暴発して銃身に羞恥という名の破裂を起こさせた。
顔真っ赤にしてどもる俺の方が不審者扱いされました……。

とりあえず鉄道警察で事情を説明することになったが、痴漢はまったく認めようとしない。しかも、警察が前にいるときに限って善良な社会人のふりをしてやがる。

「だからはっきり見たんですって！　こいつがこの子に痴漢しているところ！」

「混雑していたからそんな風に見えたかもしれないけど、誤解ですよ。坊や。君のその正義心は世間から見たら賞賛に値するけど、だからってこういうのは困るよ。僕はこれから取引先に向かうところなんだから勘弁してくれ」

む、むかつく～！　まるでこっちが狂言扱いされるような方向に持

っていきやがって！　警察もなんか向こうの方を信用し始めているような感じだし！

「う～ん……。で、君。本当に触られたの？」

直球で被害者である未知子ちゃんに聞いてくる警察。もう少し言い方があるだろうに！

「そ、それは、その……」

まだ落ち着いていないのか、はっきりと口に出すことができないようでいる未知子ちゃん。

「……」

本人が明言しない限り、痴漢事件はうやむやになって、無かったことになってしまう。だからといって、俺から彼女を後押しして発言させても解決にはならない。それじゃあ強制させたと思われ信用してもらえない。なにより一番大事なのは、彼女が自分自身で言わなければならないということだ。

だから俺はただ彼女を信じて、まっすぐ見つめることだけにした。

「……ふー。ご本人もはっきりしませんし、もういいじゃないですか？　そろそろお暇させてもよろしいでしょ？　僕は急いでいるんです」

男は席を立とうとする。

「おい、逃げるのか？」

「君もいい加減にしなさい。その年になっていつまでヒーローごっこしているつもりだい？　善意ある行動が他人の迷惑になることぐらい覚えたまえ。これ以上言うなら痴漢冤罪として訴えるよ？」

俺の挑発的なもの言いから、温和な態度を緩めて、不快な表情を浮かべ法律を持ち出してくる男。化けの皮が剥がれてきやがったな。

緊迫した空気が辺りを包む。

警察がまあまあと落ち着かせようとしたときだった。

「そ、その人……。私に触りました！　間違いありません！」

未知子ちゃんが男に指をさし、ついに高らかに宣言した。

「き、君までなにを……だいたい仮に痴漢があのときいたとして、それが僕っていう証拠は……」

「あ、あのっ！」

交番の入り口から声をかける中年女性の声。全員の視点が彼女の方へ向く。

（あの人。たしか同じ車両に乗ってた……）

近くで痴漢事件が起きているのに、見ぬふりをして携帯電話をいじってた人の一人だ。

「わ、私もその男の人がその子に痴漢しているの見てました！　証拠もケータイの動画で撮ってます！」

自分の携帯電話を取りだし、動画を再生させる女性。そこにははっ

きりと鼻の下を伸ばして未知子ちゃんにセクハラする男の姿が映っていた。

うわぁ……だらしない顔……。

そうか！　この人が携帯電話をいじっていたのは動画を撮るためだったのか！

グッジョブ！　おばはん！

「これは、動かぬ証拠だな。本署まで来てもらおうか」

男を連行させようと警察が動こうとした刹那……。

「く、くそがあああああああ！！」

男は往生際悪く逃亡しようとした！

「なっ！　待たんかこの！」

開き直りやがったのか、態度を一変させ錯乱状態になっている。

「！」

入り口から逃げようとする男の前に、未知子ちゃんが逃がさないために立ちはだかった。

「どけ！　小娘が！」

「あ、あぶない！」

男は拳を未知子ちゃんに振り上げ殴ろうとする。それでも未知子ちゃんは退こうとせず、両手を広げて立つ。

（間に、合え！）

俺は足に全力を込める……。

ゴギッ！

「っ！」

鈍い音は未知子ちゃんからではなく、俺の頬から鳴った。

（か、間一髪……）

なんとか彼女を庇えた。

「ガキが！　舐めやがって！」

男はさらに激高するが、すでに警察に押さえ付けられていた。

「痴漢に限らず、暴行まで加えるとは。覚悟はできているな！」

泣き喚く男を警察は連行していった。

「いてて……」

「だ、大丈夫？」

未知子ちゃんが俺に心配の声をかける

「あ、ああ。平気、平気」

「でもすごく腫れてるよ？　こっち来て」

「え？　う、うん」

未知子ちゃんに手を握られたことで少しドキドキしながら、俺と彼女はホール内のベンチに移動した。

未知子ちゃんはハンカチを水道で濡らしてきて、俺の頬に当ててくれた。

「染みる？」

「いや、気持いいよ。ありがとう」

お礼を言われて安心した笑みを作るが、すぐに申し訳なさそうな顔になる。

「ごめんね……。私が無謀なことしたせいだよね」

どうやら彼女は自分の行動のせいでこうなったことに罪悪感があるらしい。

「え、いや。気にしないでよ。こっちだって勝手にしたことなんだから……。それに、君がやったことは勇気ある行動だったと思うよ。確かに無防備で危なかったけどさ、その心意気自体は間違いじゃないはずだって」

「でも……」

「気にしない気にしない。それに君みたいなかわいい女の子が殴ら

れるだなんて、我慢ならなかったし」

「えっ」

って、また悪い癖で余計なこと言っちゃったよ俺！
気になっていた少女が目の前にいることで、いろいろテンパってしまっているらしい。

未知子ちゃんは俺の発言に頬を赤くし俯いてしまう。俺も気まずさから、しばらく沈黙が続く。
なにか話を切り出すべきかと試行錯誤している間、先に沈黙を破ったのは未知子ちゃんだった。

「……その制服、同じ桜高だよね？　一応同級生でいいのかな？」

「え。あ、ああ。そうだな。自己紹介してなかったな。俺、小野光真。クラスは……組」

俺が名乗ると彼女も名乗る。俺は未知子ちゃんのことはすでに知っているのだが、向こうからすれば初対面なので、合わせることにする。

「同い年なんだ……。すごいね、小野君。同い年なのに、私と違ってすごい勇気があるんだね」

「え？　……いや、あの、え？」

どこか尊敬するような眼差しで、未知子ちゃんは俺を見る。慣れないその視線に俺は戸惑ってしまい、上手く言葉が返せなかった。

「……意外と、声って出せないものなんだね。いざとなると」

未知子ちゃんは自嘲するように呟く。

「私すぐに『痴漢です』って叫ぼうとしたのに、怖くて全然声がでなかったの。自分でも驚くくらい。それで、周りの人も気付いてるのに助けてくれなかった。それが悲しくて、そして勇気が出せない自分が悔しくて……」

俺は黙って耳を傾けた。

「でも、小野君が助けてくれた」

そして再び潤った瞳で俺を見つめる。若干、頬が赤い気がした。

「すごく、嬉しかった。誰も助けてくれないって思っていたから」

「あ、当たり前のことしただけだって！」

未知子ちゃんの妙に熱い視線に耐えかねて、俺はあたふたしてしまう。

まずい。すごい顔が熱い。

そんな俺に構わず、未知子ちゃんは瞳を輝かせる。

「当たり前って思われてるものほど、なかなかできないことだと思うよ？　だから、すごく勇気がある人なんだなぁって助けられたとき思った。……ほんと、すごいと思う」

ほ、褒めすぎではないだろうか。

というより、こちらとしては声が裏返ってしまったことが恥ずかし

くてしょうがないのだが……。彼女の中であのときの状況が若干美化されているような気がしないでもない。

「小野君が助けてくれたのに、私ったらまだ怖がって、あの人が痴漢したことはっきり言えなくて……。痴漢が帰ろうとしたとき、どうしようって焦ったんだけど、そのとき『逃げるのか？』って小野君が言ったでしょ？　その言葉、私にも言われた気がして、勇気を出して言わなくちゃって思えたの。だからあんな行動もできたんだ」

そう言って未知子ちゃんは俺の手を握る。俺は頭が沸騰して汽笛が鳴るのではないかというぐらい激しく紅潮する。

だ、だって、憧れの未知子ちゃんが俺の手を、握って！

「本当にありがとう、助けてくれて、勇気をくれて」

トドメになんとも可愛らしい微笑みで、俺の心を幸せで完全にノックアウトさせる。

（ああ、生まれてきてよかったよ、俺……）

やっぱり未知子ちゃんはとんでもなく可愛い。背が高く、プロポーションも良くて、笑顔が素敵だ。それに加えて大人しそうで女の子っぽい見た目だから、不謹慎だけど痴漢に狙われやすかったんだろうな……。

けど、今の彼女を見ていると、もうこの先痴漢に遭っても自分で対処できる勇気を持っていると思った。根拠はないが、彼女の力強く眩い目を見ているとそう思えた。

「ねえ、連絡先教えて？　改めて、お礼がしたいから……」

というわけで、未知子ちゃんともメルアドと電話番号を交換した。
交換する際、しずかには悪いが、彼女ときと比べものにならないくらい緊張した。それと同時に舞い上がるほど嬉しかった。

（こんなに早く憧れの未知子ちゃんと仲良くなれるなんて……）

感動のあまり涙が出そうになった。

別れ際、未知子ちゃんは「……いつでも連絡していい？」と聞いてきて、俺は「もちろんさ！」と即答した。バッチ来いである。
彼女は安心した表情になり、「小野君も好きなときに連絡してきてね♪」と笑顔で手を振った。
いやあ。ほんと未知子ちゃんは可愛いなぁ、連絡し合えるようになって嬉しいなぁと、俺はにやけ顔&スキップして歩くという傍から見たらキモいことこの上ない有様で帰宅していた。

（しかし、喜びのせいか身軽な気がするなぁ。なんか荷物があったような気がするが……）

そこで気付く。買ったコミックが手元にないことを。

（しまったぁ！　いざこざの後つい手を離してどこかに放置してしまった！）

ま、まずい。あんなきわどい内容のものを誰かに拾われたら！
……いや待て。冷静になれ。誰かの落とし物なんて、拾った人はわからないだろうし……、名乗り出なければ俺が持ち主であることは明かされない。

うん、そうである。あの本を失ったのは惜しいが、社会的に死ぬよりはマシなはず……。

しかし、世界はどうやってでも俺を喜劇の人物にしたいのか、俺にとって死刑を告げる出来事が到来する。

俺の携帯電話からメールの着信音。開くと、送り元は未知子ちゃんからだった。

まさか、と思い、俺は恐る恐るメールの内容を見た。

?さっそくメールしてみました（＾＾）　あのね、小野君が帰った後ベンチで本が置いてあるのに気付いたんだけど、これ小野君のだよね？　今度会ったときに渡しますね♪それじゃあ、また（＊＾＾＊）ノ？

（ぎゃあああっ！　よりによって未知子ちゃんに拾われたぁ！　お願いだ〜！　中身は見ないでくれえええ！）

彼女に限ってそんなことはしないと思うが……。もし見てしまったら、痴漢があった手前、一気に幻滅されてせっかくの関係があっけなく崩壊してしまいそうだ……。

（やっぱりここは注意のメールを……ああ！　でもそんなメールしたら露骨すぎるし、いったいどうすればぁぁぁ！）

その夜、本の中身が未知子ちゃんに見られないことを祈りながら、ずっと悶々して寝れませんでした……。

今日、彼が出会った、三人の少女。
そして幼馴染の少女を含めたこの四人を中心にして、彼の物語が動き出すことを、もちろん彼は知るはずもなかった。

第四話「入学！」（後書き）

大分間が空いてしまいましたが、一日置きの投稿は調子のいいときに限られるので、基本的にはこのペースです。
それでもがんばって早めに更新していきたいなあと思っています。

ついに入学です。ヒロインも増えました。やったねコウちゃん！
一応、木村文恵、木下しずか、若王子いちご、遠藤未知子、この四人がメインヒロインの予定です。だからといって他のモブ娘を蔑ろにするわけではないので、そこはご安心ください。希望によっては増える可能性もあるかも。
（四人中心にして動くって書いたじゃねえかよ？）
ま、まあいいじゃん？

ご感想、ご意見お待ちしております。よいお正月を＞（＿＿）＜

第五話「部活！」（前書き）

新キャラ二人登場です！
出番少ないけど……、これから増えていくぜ！
では投稿！

第五話「部活！」

本日も暖かく春らしい天候だった。桜高の生徒達も過ごしやすい天候の下、晴れやかな笑顔で登校してきている。
だが、俺はそんな天候でも晴れやかになれず、不安と焦りで心が浸透されている。

「はい、小野君。忘れ物の本」

ただいま遠藤未知子ちゃんに、先日忘れて置いてきた際どい内容の漫画を渡されているところだった。

「ア、アリガトウ……」

緊張のあまり声が片言になってしまった。
彼女の様子からだと、袋の中身は見られていないようだが、一応確認を取る。

「え、遠藤さん。その、袋の中身とか見ちゃった？」

「え？　ううん。勝手に人の物見たりしないよ？」

ほっ。未知子ちゃんが良識のある子で助かった。とりあえず危機は免れたらしいことに安堵する。

だがそんな俺の露骨な態度のせいか、彼女の口から……

「……もしかして、エッチな本？」

と爆弾が投下された。

（ぎゃあああ！　図星を突かれたぁぁぁ！）

しかし、向けられるのは軽蔑の視線ではなく、悪戯っぽい笑顔だった。

（あ、あれ？　さほど気にしていない？）

痴漢事件のせいでその類のことに関して過敏になっていると思っていたのだが、彼女曰く、「男の子なら普通でしょ？」とのこと。

「別にそういうの読んでいる人が必ず犯罪するってわけじゃないでしょ？　……それとも小野君はそういうことしちゃう変態さんなのかな？」

「い、いや！　そんなことはしないよ！？　断じて！」

「うん、知ってる。私を助けてくれた人だもん♪」

小悪魔っぽい笑みで、くすくすと笑う未知子ちゃん。

か、からかわれているというんだろうかコレは？　だが不思議だ。なんだかいやじゃない。こんな可愛い子に弄ばれているかと思うとそれだけでぼくぁは……みたいな心境になる。って未知子ちゃんって意外とSだったりするのか？

とりあえず、未知子ちゃんは犯罪に走らない限りは、性に関して寛大な模様。

彼女の意外と男らしいカラッとした部分がある性格に、なんとか俺は救われた。

よかった。「エッチなのはイケナイと思います！」なんて男の夢を全否定される言葉を言われなくて……。

そういえば、文恵も――苦い顔をするものの――そういう類にはある程度大目に見てくれるな。今朝もそんな感じだった。

昨夜、漫画の件で頭を悩ませていたことによりなかなか睡眠ができなかったものの、さすがに途中で寝入ってしまったようで、気が付くと朝日が昇った時間帯になっていた。

う～ん、いやな目覚めだなぁと重い瞼を持ち上げると、視界いっぱいに文恵のドアップ顔が目の前にあった……。

（って怖っ！　なんでこんな朝早く俺の部屋にいんの!?）

というか無表情で俺を見降ろしているのもまた不安を煽った。

「ど、どうしたんですか、文恵さん？」

意図が掴めない文恵に対しては、例に及ばず敬語を使ってしまう。

「コウくん……、昨日なにかあったの？」

なにやら真剣に尋ねてくる文恵。

どうやら昨夜、俺の苦しみ悶える奇声が隣家からも聞こえてきたらしく、またもや心配性スキルを発動したらしい。

「え？　昨日は、そのぉ……」

内容が内容だけに俺は言い淀んでしまう。そんな態度がさらに文恵の過保護欲（謎）を刺激してしまい、より一層顔を近付けて「話して！　コウくん！　私力になるよ！？」と言ってくる。厚意は嬉しいが正直怖かった……。

「や、落ち着けって！　文恵！　……と、とてもじゃないが話せる内容じゃねえんだ……。お前はこれ以上関わっちゃいけねえ……」

説得力を持たせ、忌避の感情を起因させるために、俺はハードボイルド風味のボイスでさらには腕組ポーズも決めてきっぱりと断言した。

が、長年付き合ってきた幼馴染相手には、俺の演技など日常的なものなのでほとんど効かず、逆に「コウくんが、そんな似合わないセリフで誤魔化すのは相当なことがあった証拠だよ！」と言われる始末。つか似合わないとか言うな！　そんなの自分が一番わかっとるわ！

けっきょく話さなければ引き下がらない様子の文恵に、俺は顔真っ赤にして渋々事情を話した。

話し終えると文恵は、

「なんだ。いじめとかじゃなかったんだね。なら安心♪」

とあっさり心配の色を消した。

「いや！　心配しろよ！　いじめはなくても俺の社会的立場の命運がかかってるよ！」

「大丈夫だよコウくん。男の子ならそんなの普通なんだから、その遠藤さんも理解してくれるよ」

「文恵みたいな寛大な子は少ないの！」

……とまあ、文恵の言う通り俺の心配は杞憂に終わったわけだが。しかし、内容を見られなかったからこそ解決したことだと思う。見られた日にはさすがに彼女達が受け入れてくれるか自信がない……。文恵も「でもあんまり刺激の強いのはほどほどにね？　コウくんがマニアックすぎると私もちょっと怖いし……もしものときに……」って言ってたしな。

俺自身はアブノーマルってわけじゃないけど、知り合いに恥をかかせないくらいには自重しないとな。

……んっ？　あのとき、なにか重要なこと聞き逃した気がするが気のせいか？

「ねえ？　小野君は部活なにに入るか決めた？」

未知子ちゃんと雑談している途中考え事していると、話題はいつのまにか部活のことになっていた。

「え？　部活？　いや、まだ決めてないけど……」

部活かぁ。学生生活を充実させたいならば入って損はないだろうが、特に情熱を注いでやりたいと思うものがない……というかわからない。

――まるで一期の唯だな、と僅かな共通点に少し嬉しさが込み上げ

た。

そういえば、三年二組のモブ達の部活動は判明しているのも多いが、そのほとんどは運動部だ。となると男女別は確実。男女別では、仮に入部しても彼女達との交流は少なさそうな気がするし、交流関係がその部活内で制限されそうだ。なによりそのような不純な理由で入部されると部活のほうは迷惑だろう。

とりあえず今のところは検討しておこう。もしかしたら本気でやりたいものが出てくるかもしれないし。

「小野君もまだ決めてないんだ。私も悩んでるんだぁ。おもしろそうなのはいっぱいあるけど」

「そうなんだ。うーん、一応文恵にも聞いてみるかな、どんな部活に入るのか」

最近の文恵だと、一緒の部活に入るとか言いだしそうだが……

「……文恵って、誰？」

「えっ？」

文恵の名前が出た途端、未知子ちゃんは若干冷たさを含めた声色で尋ねてきた。未知子ちゃんは低音ボイスなので、そういう感じに話されると少し怖い。

「え、ええと。俺の幼馴染だけど……」

「名前からして、女の子だよね？　下の名前で呼び捨てなんだ。仲いいんだね……」

「ガ、ガキの頃からの付き合いだからね。兄妹みたいなもんだよ……」

しばらく続く沈黙。

な、なぜだ！　なぜ急に彼女は不機嫌になった！　まるで今朝の登校中の文恵みたいじゃないか！

昨日の事の顛末を話し、大した問題じゃないと安心した文恵だったが、なにか別の心配事が起きたのか、俺の横で歩きながらぶつぶつと「話を聞く限りその遠藤さんてもしかしてコウくんに……いや、でもコウくんの幸せを考えれば……だけどやっぱり……」と呟きながら暗いオーラを発していた文恵と、いまの未知子ちゃんの雰囲気は似通っていた。

どないせっちゅうねん！　この状況！

機嫌悪くした女の子を相手にする高スキルなんて持ってないのでこの状況は非常に困る。文恵相手ならまだやりようがあるが……。

「ねえ……」

「な、なんでっしょい！」

未知子ちゃんに声をかけられて背筋が強張るが、すでに彼女は黒いオーラを消し、逆にちょっと恥ずかしがるようにおさげの髪を指でいじっていた。

「……その幼馴染の子のこと、好き、なの？」

……えっ？

なぜ急にそんな話に？
質問の流れがわからず困惑する俺だが、未知子ちゃんはからかいで聞いているようではないので、真面目に考えてみる。

好き、か。
そう問われたならまずイエスと言えるが、ＬＩＫＥとＬＯＶＥどっちか言われると途端に断言できなくなる。文恵が大切な存在なのは間違いないが、それは幼馴染に対する友情と兄妹愛のようなものが混同しているものだった。それが世間から見て恋愛感情と言えるのかは判然としない。
こうはっきりしないのは俺自身もいやなことだが、情けないことに明確な答えが出せなかった。だが中途半端な気持ちで好きと言うのはもっといやなことだった。そして中途半端な感情で文恵を振り回し傷付けるようなことになったら、一生自分を許せなくなるだろう。
だから、現時点では大事な幼馴染という結論しか出せなかった。

そんな俺の答えを聞いて未知子ちゃんは「そっか」とどこか安心したような表情になった。
俺自身は情けないと思える回答に、未知子ちゃんは満足した様子。
ますます謎だ。

「……よくわかんないけど、文恵はいい子だよ？　未……遠藤さんも会ったら仲良くなれると思え……」

「……名前」

「えっ？」

未知子ちゃんは急に俺の言葉を遮り、

「私のことも下の名前で呼んで？」

と要求した。

「えっ？　どうしたの？　急に」

こちらとしては喜ばしいけどなんでまた？

「そのほうが親しく感じるでしょ？　名字じゃいつまでも他人行儀だし。それになんだか私の名前言いたそうにしてなかった？」

ま、まあ心の中では？未知子ちゃん？だからね……。ちなみになぜか彼女は？ちゃん？付けで呼びたくなってしまう。そのほうがなんか似合うし、しっくりくるのだ。

念願叶って彼女の呼び方を口に出せるのは嬉しいが……。

「えっと、……未知子ちゃん、て呼ぶけど、これでいいかな？」

一応、呼び方の是非を問うため確認を取る。

未知子ちゃんは俺に名前を言われると、頬を赤らめ、

「未知子ちゃん……。うん！　うん！　全然ＯＫだよ！　私もこれからは光真君って呼ぶから！」

そして急にテンションが上がって目を輝かせる。

そして俺も同じく感動に胸が打ち震えていた。

（光真君……。憧れの未知子ちゃんに名前で呼ばれた！　いまの俺超幸福だぁーーーっ！　わっしょ～い～！）

そんな感じで未知子ちゃんとの距離がより縮まった、そんな朝だった。

「光真君かぁ……。ぐへへへ」

「小野くん……。また気持ち悪い笑い方してるよ……」

おっと、またか。いかんいかん。

未知子ちゃんに名前で呼ばれた瞬間を、あの後も度々回想してはにやついている俺にしずかが注意をしてきた。

「授業中もそんな感じだったけど、そんなにいいことがあったの？」

「ああ、あったさ。生まれてきてよかったって思えることがな……」

また大袈裟な……としずかは苦笑いするが、いいんだ理解されなくったって。俺だけがこの幸福を噛みしめていればそれでいいんだ……。

頬づえを突き、窓の外を眺めて黄昏れる俺にしずかが「お～い、帰ってきて小野く～ん」と声をかける。

「あっ、そういえばしずかはなにか部活に入るか決めたか？」

ちなみにしずかもすでに呼び捨てにしている。理由は未知子ちゃんと同じで早く親しくなれるという理由で俺が持ちかけたのだが、実

のところ同年代の男子に呼び捨てにされて恥ずかしがるしずかの姿を拝みたかったからでもある。

「う～。なんか呼び捨てにされると恥ずかしいよぉ……」

という具合にである。

そんな姿にまたもや俺の？しずか愛でたい病？が再発し、「ほおら俺のことも名前で呼んでごら～ん？　しずかちゃ～ん」とつい意地悪に言ってしまい、「そ、そんな意地悪する人にはまだ呼んであげないもん！」とぷいっと断られてしまったので、未だにしずかは俺のことは名字で呼ぶ。

ふっ、愛らしい奴め……。

「部活？　う～んまだ未定かなぁ。でも私、運動そんなに得意じゃないから文化部を考えているけど」

そっか。しずかも未定か。

そういえばしずかがなんの部活に入っているのかは公開されなかったなぁ。一応オカルト研に友達ができることは判明しているのだが、もしかしてそこに入部することになるのかな？

「じゃあさ、オカルト研なんてどうだ？」

「えっ？　なんでオカルト研？」

「いやさ。しずかの髪型って鬼〇郎みたいだからその繋がりで……」

「こ、これはファッションだもん！　ひどいよ！　小野くん！」

俺の指摘にしずかはぷんすかする。

（……ったく、なんでこいつは怒るだけでいちいちこんなに可愛いんだ？）

まったく反省しない俺はさらにしずかの可愛い姿を拝むために挑発しようとする。

まずしずかの頭をがしっと両手で包む。

「ふえっ！」

驚くしずかを無視して、俺はしずかの鬼○郎ヘアーをシャンプーするかのようにわしゃわしゃと動かす。

「どこだぁ！　一つ目のおとうさんはどこだぁ！　隠れてないで出てこ～～い！」

「ふえええっ！？　目○おやじなんていないからヤメテーー！」

「いやっ！　しずかの父ちゃんのことだ！　髪の中に収まるくらいちいちゃいに違いない！」

「ちいちゃいって言うなぁあああああああっ！」

しずかをからかうのは楽しいなぁ……。

しずかと順調にコミュニケーション（？）をしたところで、俺の喉が渇きを訴えたので自販機でジュースを買うことにした。

（う～ん。なんかシュワッとしたの飲みたいから……）

「そうだ、コカコーラにしよう」

ボタンを押し、ボトルが取り出し口に落下したところで、コーラのボタンランプが？売れ切れ？のマークを表示する。

学校の自販機で売れ切れなんてあるのか。てかコーラ人気だなおい、と思いながらコーラを取り出し、教室に戻ろうと自販機の傍を離れたところで

「ああっ！　コーラが売れ切れてるーーっ！！」

と後ろから女子の嘆きの叫びが聞こえた。

（ん？　待て。コーラ絡みで騒ぐ女子って言ったら……）

案の定自販機の前で頭を抱えているのは、三年二組モブ娘の一人、瀧エリだった。ロングヘアーをサイドテールにまとめた女の子らしいヘアスタイルをしているが、コーラ好きでちょっと男勝りしている少女だ。けいおん二期本編で最初に喋ったクラスメイトとして注目され、モブキャラのブームのきっかけになった人物でもある。

そしてその後ろにいるのは同じく三年二組モブ娘でエリの友人である佐藤アカネだ。青みがかった黒髪と大人っぽい雰囲気に、長身で抜群のスタイルをしている美容師希望の少女である。彼女は唸るエリを見て、やれやれと言った具合に立っていた。

「ぬわ〜！　私のエナジードリンクがないなんてぇ！　どうやって次に授業乗り越えればいいんだぁ！！」

「大袈裟だよエリ。隣にあるダイエットコーラでいいじゃない」

「ダイエットコーラは偽物！　私は赤印のコーラがいいの！」

「う〜ん。じゃあコンビニで買うのは？」

「わかってないねアカネ！　学校の自販機で買ったほうが安いんだよ！？　バイトしてない女子高生には良心的なんだから！　……それにいま買いに行ったら次の授業に間に合わないし……」

それ以前に放課後でもないのに学校を出るなとツッコミたくなるが、とりあえず抑えて俺は二人に近付いた。

「あのぉ、よかったらこれどうぞ。さっき買ったやつでまだ開けてないし」

二人は会話に入ってきた俺にきょとんとしたが、二人の内エリはすぐさま顔を歓喜に染める。

「えっ！　よ、よろしいのですかいな！？」

よくわからん敬語を使っているが、あえて指摘せずどうぞ、どうぞと差し出した。

「うわぁ！　ありがとう！　超いい人だよこの人！」

喜びのあまりエリは受け取ったコーラを空高く振り回す。って振る

なコラ！　溢れるだろ！

「えっと、いいの？　別に気にしなくてもいいのに」

アカネは申し訳ない気持ちのようで俺に確認を取ってくる。

「いいよ、コーラぐらい。別の他の飲みものでも……」

「なにっ！　コーラぐらいとはなんだ！　いつ飲んでも飽きないおいしさ！　エネルギーを補強してくれる素敵飲料だぞ！」

俺の些細な言葉にエリが反応する。

……ていうかテンション高いなこの子。

「こら、エリ。親切にしてくれた人に失礼でしょ？」

「アウチ！」

騒ぐエリにアカネがビシッと額にチョップを喰らわす。

アカネもエリの前だとお姉さんみたいなキャラになるんだな。

なんか律と澪の関係みたいだ。

「え～と。ごめんね。お返しにジュース買うから、飲みたいもの選んで？」

「おう！　アカネ太っ腹！　さあさあ遠慮なく選びたまえ！」

「貰ったエリが払うに決まってるでしょ！　あと太っ腹って言うな！」

再びアカネのチョップがさく裂する。

「なんだよぉ、ただのことわざじゃーん！　……ははぁん？　さてはアカネェ、また体重が増えたんだなぁ？」

「なっ！　や、やめてよ！　男の子の前でそんな話！」

アカネは体重ネタに過敏に反応する。

ちなみにエリよ。太っ腹はことわざではなくただの俗語だぞ。

内心でツッコミどころの多いエリに溜め息を吐いていると、エリがアカネの言葉に首をかしげ、俺の顔を直視する。

「男の子？　……ああっ！　ほんとだ！　よく見たらこの人、男子だった！」

「いや！　いま気付いたんか！？」

さすがにエリのボケっぷりについに俺はツッコミを入れた。

「いやぁ、周りが女子ばっかりだから共学になのすっかり忘れてたよぉ♪」

びっくりびっくりという具合に笑うエリとそれを呆れた顔で見るアカネと俺。

心情が一致したためか、アカネと目配せで「なんか大変だな」「いえいえ慣れてますから」と会話が成立する始末。

エリってこんなにはっちゃけた娘だったんだな。男勝りというよりはムードメーカーだ。

「ねえねえ？　女子ばっかりの環境で少数の男子ってどんな気持ち

？　ウハウハな気分？　それとも昼ドラみたいにひどい差別とかあったりするの？」

まるで？ねえどんな気持ち？？と腕を広げて、トントンとステップして踊り出すような不躾な質問をしてくるエリ。

俺は？悔しいです、ビクンビクン？なんて言葉をもちろん返すわけもなく、ただ彼女のテンションに困惑するばかりであった。

「いい加減にしなさい！　そんなことしてないでさっさとジュース買ってお礼言いなさい！」

「あいたー！」

今度は脳天に凄まじいチョップをお見舞いされ、エリは痛みに悶えた。

さすがバレー部に入る予定の子……。すごいチョップだぜ。

……いやチョップってバレー競技に関係あるのか？

しかし、こう見てるとほんとやってることがまんま律と澪だな。二人と違うのは、エリは律より女っぽい容姿で、アカネは澪よりヘタレじゃないってところか。

「ほんとごめんなさい……。もう私が払うからなにか好きな飲みもの……」

そう言ってアカネは財布を取り出すが、

キーンコーンカーンコーン

と予鈴が鳴ってしまった。

「あっ、いけねえ！　なぁ、ジュースはもういいから教室に戻れよ？　別にいいからさ」

「え、で、でも……」

良心の呵責からアカネは悩んでいるようだが、

「アカネー！　急がないと次うるさい古典の先生だぞー！」

エリはさっさと駆け出す態勢に入っていた。

「もう！　エリったら！　……ごめんね！　後で昼休みに会いに行くから、クラスと名前教えて？」

「えっ、ああ、うん……」

クラスと名前を告げると、「うんわかった。じゃ、また後でね？」と申し訳なさそうに頭を下げてから、アカネも走って行った。

……やれやれ。嵐と凪みたいなコンビだったな。

「って、俺も急がねえと！」

走りながら教室に向かう中、もしかしたらこれでバレー部とのコミュニティができるかもな、とぼんやり期待した。

（けど、エリのあのテンションに振り回されるのはちょっと苦労するな……）

そこのところ踏まえると、アカネとは気が合いそうだった。

（この調子で仲良くなれるといいな……）

部活にはまだ入らなくとも、広い交友関係を得られれば、あんまり関係ないかもしれない。

こんな具合で、俺のモブ人生は進行していくのであった。

第五話「部活！」（後書き）

というわけで瀧エリと佐藤アカネの登場回でした。
自分的にはこのコンビ大好きなので、可愛く楽しく書けたらなぁと思います。
というか、だんだん文恵さんがヤンデレ化しつつあるなぁ……。なぜだ？　こんな筈では……。
まあ可愛いからＯＫ！（おい

ご意見ご感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7276z/

けいおん！モブ王

2012年1月9日03時45分発行